

櫓太鼓

青高砂

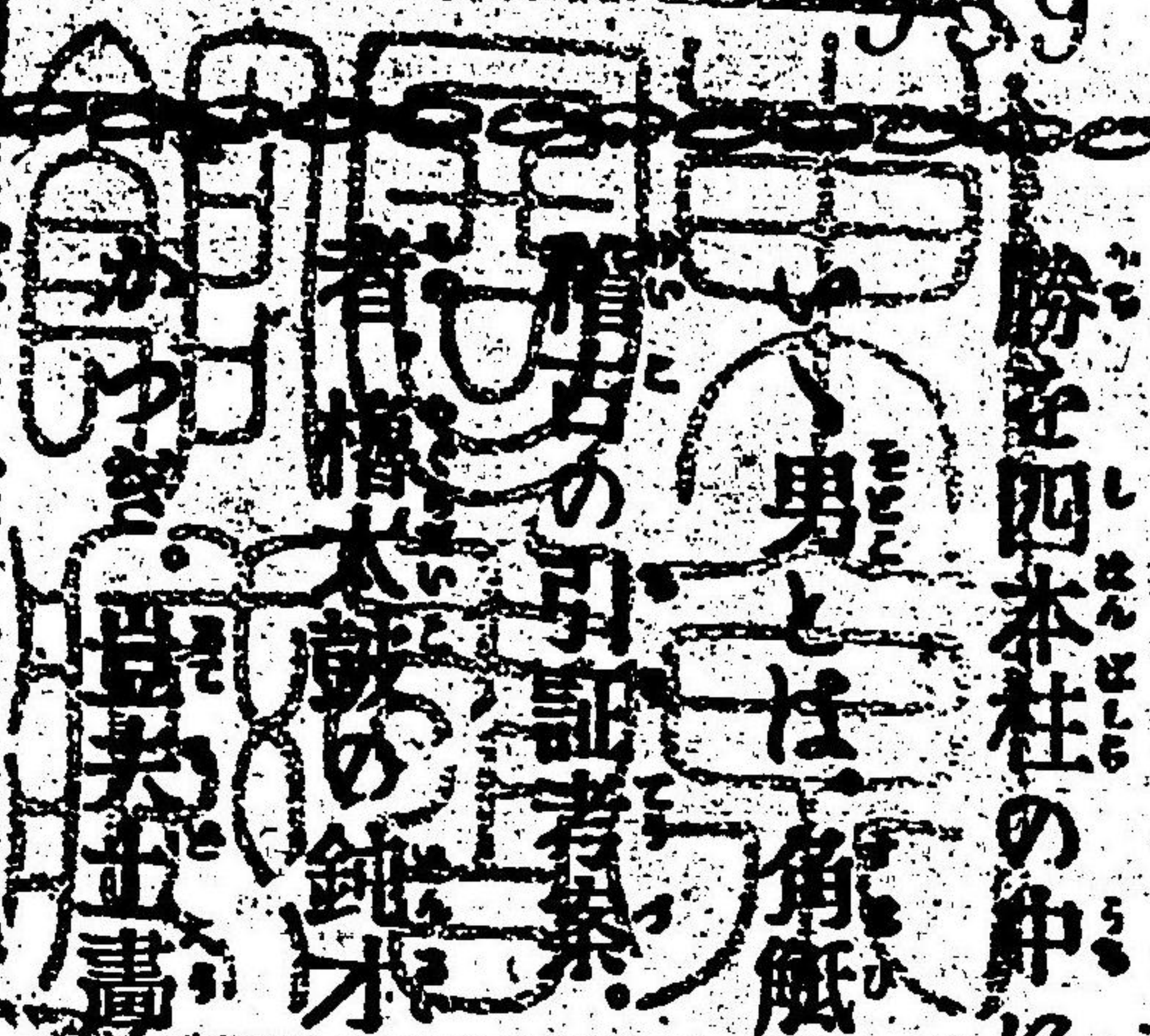
164
808

高砂浦五郎之傳



四十八手 櫓太鼓音高砂前編自序
相撲古實

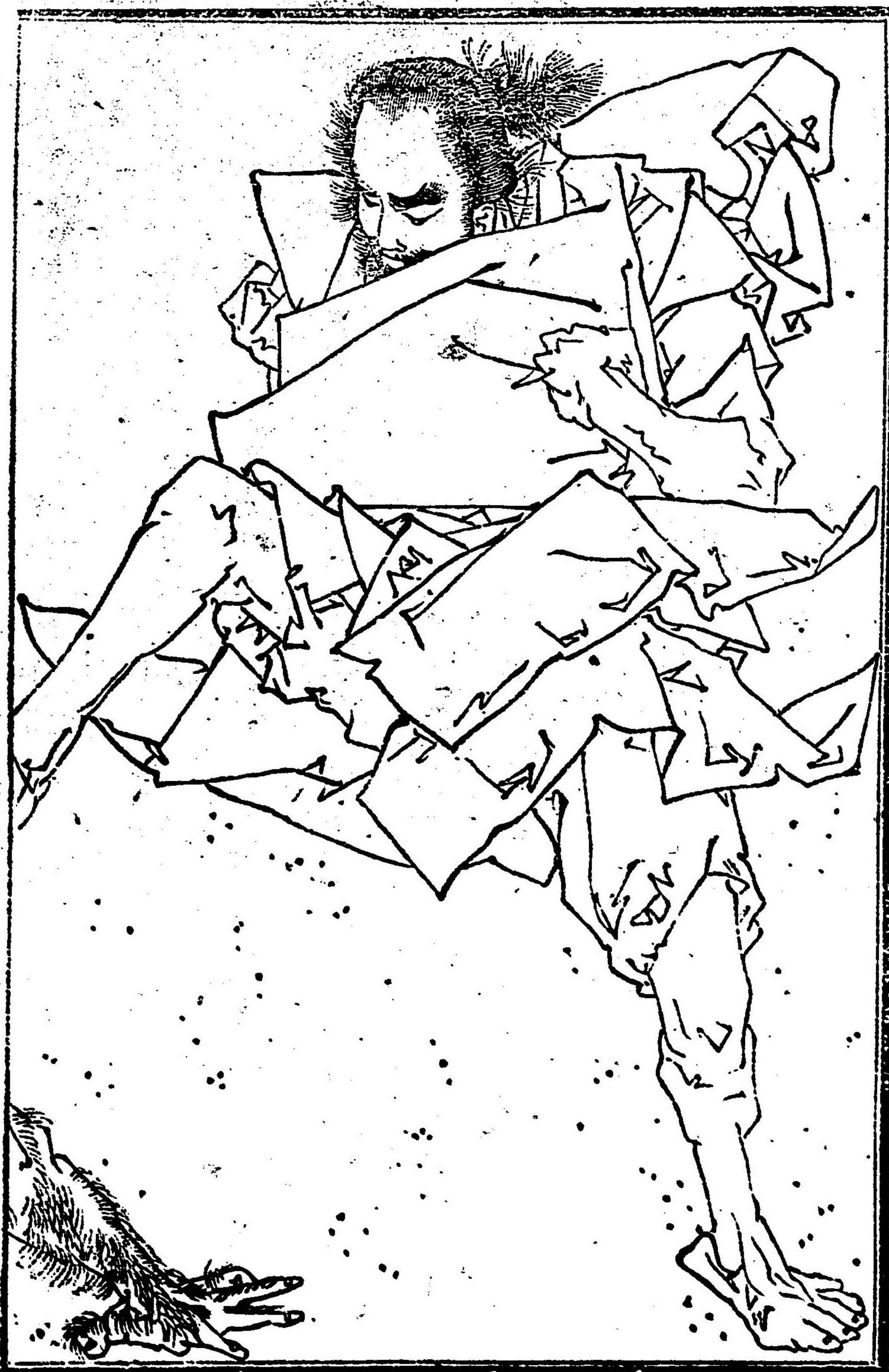
特46
939

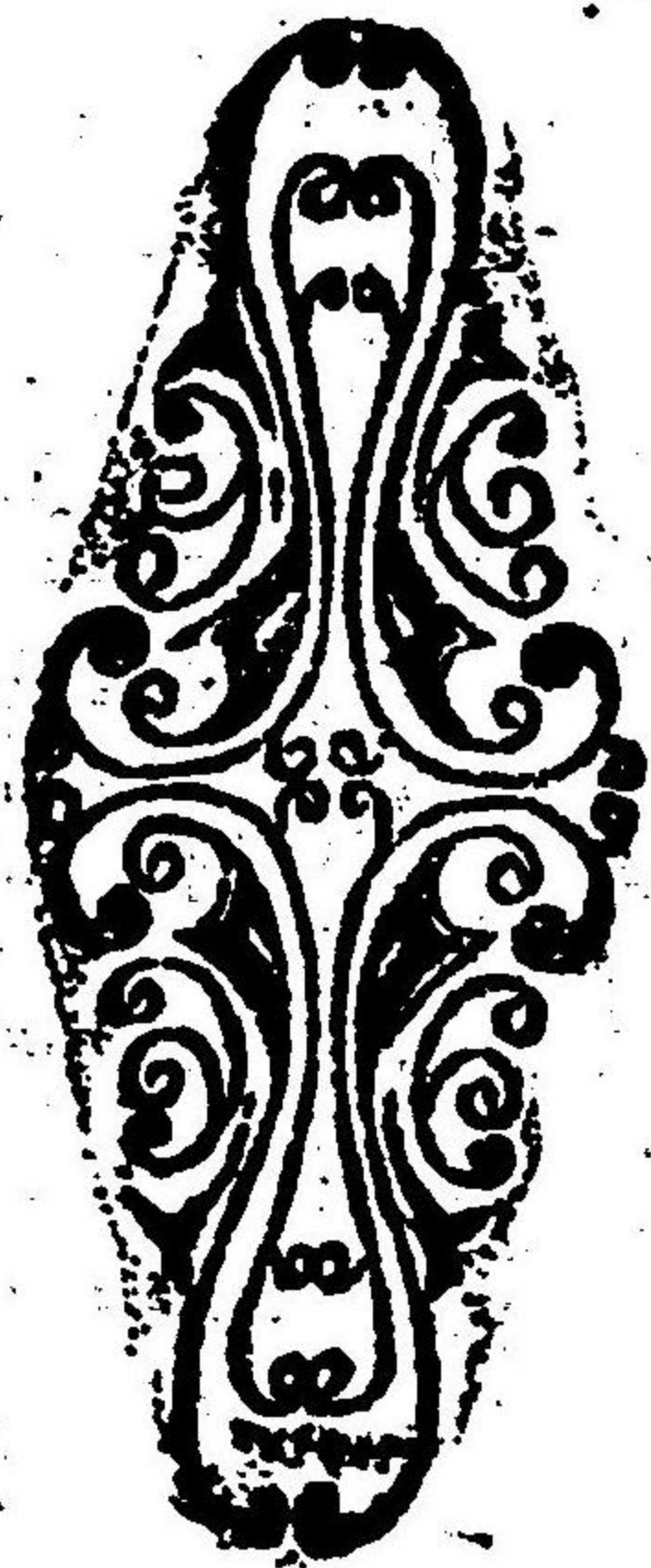


勝を四本柱の中に決し、名を番附の上に揚げ、一年を二十日を暮す
男とは角瓶土の上なるべし。おのれ此草紙を編らんと。朝夕
稽古の引証者兼、師匠に示教で貰つても、趣向さへ起得ぬ無器用
者、櫓太鼓の鈍才愚魯に、四十八手は閑いて、一文も不通ぬ犢鼻褌
かゆき。昌夫土畫の晴勝負は、あぶないことと言れたが、元來厚い
面の皮押の強心が獨り自慢と、瘦た筆にも力癩、發兌す矢筈に無
錢砲あたると言ふは吉兆と、清めて茲に序とと云爾

編者 孤蝶園幻夢戯題

野見宿禰
當麻蹶速
相撲此圖





四十八手 相撲古實 櫓太鼓音高砂

第壹番

東京 孤蝶園書院編



の辨なくも、縁は長き。明治天皇の御蓋下にて當時相撲組合の惣取締の櫓太鼓の音高しく
 四本柱の四方に響く其名も高砂浦五郎が傳記と爰に掲ぐる以前記者が聊の暗記をし角舩の
 音響と説出さるゆゆ本朝角舩の起原は神代に建御雷の神。建御名方神。力説の事書事記に
 出たり是を遷賜とて申すべけれ（日本相撲之遷賜略傳といへる書には、我國相撲之技
 神代に撰興す云々あり）人代に至り人皇十一代 推仁天皇の七年七月大和の國當麻
 呂の國邊といへる強力あり材高く骨太くして角と折鉤との女常に人に誇りて罵りける 我
 べ見んもの人もなげに大言せり此事都鄙に云觸しと畏くも 帝に奏聞するものありし
 ろば 帝もろくの公卿等に詔のりして。當麻の厭速は天が下の力士なりと聞く能く彼に
 對ひて勝負と極むるものなきやと宣ふに一人の公卿進み出て白す様。出雲の國に勇める
 人あり野見宿禰と呼ぶ此ものと召させ給て彼の厭速と力と競べさせたまへと奏す 帝倭

の直の遠祖長尾市とつのはして野見宿禰と召たまふ宿禰召に隨ふて都に登り大内に於て
 速と角瓶とどらせ給ふ兩勇相對ふて立上りかのく脚と揚て闘み合ける程に宿禰の力や
 りけん厥速は脇骨と蹴折れ腰と踏挫がれて其首に仆て死したりければ見る人宿禰が怪力
 とぞ感じける 帝御 感斜ならず當麻の厥速が所領と悉くく宿禰に下し賜ひしは世是
 と腰折田と稱呼せり宿禰は 敵處とらしこみて夫より都に停まりの永く朝廷に仕へまつる
 是菅原家の先祖にして今尙相撲の祖と仰ぐに茲にまた近頃頻りに流行する小童相撲の起原
 と尋ぬるに人皇五十六代清和天皇貞觀三年六月二十八日前殿に出御まししく小童相撲と
 覽有しこと三代實錄に見えたり是とや始めと申すべけれ其後盛んに行はれ人皇六十代 醍
 醐天皇の御宇延長六年閏七月六日中の六條院にて小童相撲二十番と 敵處あり相撲はて
 舞と奏と左の方は蘇合香、右の方は新鳥蘇、次に新作の胡蝶樂と奏と其曲笛舞忠房朝臣、舞
 は式部卿親王の遊はされたり舞曲終りに船の吉寶、散樂と供じ次に羅陵王、駒形といふと奏
 す、式部卿親王には纏頭ありける事古今著聞集に見えたり近世輪進になりても諸所に小供
 相撲のあることは其餘風とこそ知られたれ

第貳番

謝子拾遺に蔡伯階が子と誦むる文と載て曰く貴賤は常なし賤人の速く所なり荷くも善なる
 時は即ち庸夫の子も三公に至り不善なるときは三公の子も反つて凡庶と爲ると宜なるかな
 爰に上總の國山邊郡大豆谷村の豪農に山崎何某といへるあり世に不自由はあらされと老て
 實の子なきと憂ひ神佛にさへ祈請と籠しか其心願の通じてや其後妻には懐妊して嘗る十月
 に産落せしは女の子なり素より獨り娘にあれば夫婦の喜悅一ト方ならず名とばおまさと呼
 せつ、蝶よ花よと育つる程に光陰は矢よりも早くおまさは既に蕾の花の綻るびかゝる年頃
 になりしかは或人の周旋にて同郡砂子村の農今井何某の長男金兵衛といへると婿養子とな
 しおまさ配偶たる後は夫婦の間も和諧く一家息災に消光しおば聞もなくおまさは懐胎し
 て其降月に出産せしは女の子(かりよと云)なり恠而以后十年と過ぎ又もおまさは金兵衛が
 胤と宿し天保九年戊戌の十一月廿日安々と誕生せしは長男の伊之助とて即ち現今の高砂
 浦五郎なり斯て伊之助が三歳の折父金兵衛が實家なる砂子村に今井佐右衛門が養子となり
 たり(此佐右衛門といへるは伊之助の父金兵衛が弟にて伊之助の爲には則ち伯父に當れ
 る人なり)さればまた山崎金兵衛は曩に父母とも亡ひたれば弘化元年の春長女かりよお家
 督と譲り同郡幸田村の農大木重兵衛の次男文五郎(三三三)と云ると舞養子に迎り都て身代と

打任せ金兵衛夫婦は小なる家と出来へ是へ移りて隠居なし家事には少しも保らず世と安樂に消光居たるの其定命にや金兵衛は其後幾春秋と送り迎へて嘉永五年子の秋に桐の一葉と散失たり是はこれ伊之助か十五歳の頃なりけり且説山崎家の養子文五郎は養父金兵衛の在と聞は務めて農業とば勵みたりしが元來懶惰の性質なるより養父が此世と去し後は日々遊惰に身と持崩し田畑の事杯願も見す農家において農事とば忘れし如く手にだも觸す加之ならず養母おまさも他人の如く取扱ひて少しも示教と守る事なく餘りの事と妻ありよが屋々泣て諫むれど露程も容ざるのみ雨に品行と亂し家には名もなき破落戸や博奕奴と呼集ら日夜酒食に耽りしものから其消費は夥多しく遂に先祖代々傳はりたる田地は勿論家財諸道具迄と賣拂ひて他人の手に委するの形状見るに忍びぬ不品行と養母は深く打敷き密のに砂子村の今井許往きて細々伊之助に物語り兩の袂と絞りしと始めて聞て伊之助は一家の浮沈と打驚るさ情々肚裏におもふ様。今老母の言葉の如くは我と生たる父の家の滅亡必らず近きにあらん吾身は當時他の爲に養なはれては居るもの、此一大事と聞ながら唯等閑に棄置は泉下の亡父に分疏なり良々吾にも有意志的と義理ある兄へ諫の一書細々と書認ため老母へ托して歸し遣り猶其舉動と窺ふに文五郎は伊之助の書翰と得ても披もやらず朝夕博徒の群に入て偶々奇よの勝負にのみ心と移してあると聞き今は伊之助も堪り難ね一日養父へ事由と申して身の暇と賜りたれば急ぎ大豆谷村へ來て見るに昔日に變る爲体現在農家の檐にある農具は甚く錆朽て物の要にも足ざる有様。門戸は破ても修繕はず三徑は葎の生茂りて泪の露と置ばり家内の容子と鏡がふに障子と洩て聞ゆるは壺皿の音勝負の聲に伊之助は潜然と唯落涙の外はなく胸も潰るゝばりなりし斯ては果ほど伊之助は自ら心と鬼となし表の障子瓦刺離と引開け物とも言す多勢の博徒の輪と組て居る真中心へ身と躍らしで踏込たり文五郎は夫と見て有繋心に恥たりけん突然納戸へ逃込しと追んとそれは博奕共おどろき乍らに支ゆるにぞ傍に有あふ用心棒もて容捨もあらず打据ゑられ那地此地に仆れ伏し皆且らくは起も得ず狐の如くしばく見のへり猫の如く脊と高くして腰と撫。頭首と摩すり漸々其場と逃去たり

第三番

居家必用と云る書に曰く少ふして勤勞せされは老て必らず艱辛す少ふして能く勞に服せば老て必らず安逸なりと善のな言哉されは山崎文五郎は日夜懶惰に耽りし處へ突然伊之助に踏込れて有繋面目と失なひたるより納戸口より裏へ飛出し一時我家と立去りたり夫と覺り

て伊之助は老母と姉とを招き寄せ細々家事と相談し又其中に來るへしと其日は砂子村へ飯りし跡に文五郎は宅へ飯りて只顧其身の前非々悔悟し謝書一通と遣し置何處ともなく立去てその行方さへ知る者なりし是はこれ實に安政二年九月中旬の事にぞある有爾は山崎家の親類縁者は文五郎が失踪と聞て集議と遂げ第一跡目相続之義は故金兵衛の正統なる伊之助こそ順當なれと現時今井家の養子となり此方の自由にも成まじければ早々先方へ人遣し那と引取こそ良策ならめと馳て今井家へ掛合たるに佐右衛門も速やのに承諾なし伊之助が十八歳の冬實家の山崎へ復籍させ其後或人の媒妁にて同國武射郡成東村の農大橋銀右衛門の次女お雛(そのとき)と呼迎へて目出度婚姻と取結びぬ是はこれ安政三年花の彌生の頃なりけり斯る次第に及びたるより伊之助は不憶なく父の名跡は受續ものゝ先代文五郎が年久しく荒し果たる遺業にあれば其困難は一ト方ならず非常の窮苦に陥りたれを爰ぞ一家の危急の秋と豫て豪膽なる伊之助は少しも屈する氣色と見せず樹は星と感きて出で夕は月と鏡ふて歸る他も及ばぬ出精と村人は打見やりて賞賛さぬはなりのりしとぞ、茲に又伊之助は幼少より人に優れる臂力ありて角觚の遊戯と甚く好めば折々諸所の宮相撲場に立入り常に愉快の勝と得るも亦自らも又興ある事と心と慰さめ好める道とて稼業の間には近村近郷の若

者原と打寄つ角力に職氣と散じ居る中益々伊之助は力量増て鄙角力の其中には誰一人として伊之助の右に出る者もなく自分ながらも歡喜の餘り角力の名と「千鳥」と人に呼せ諸所の土俵に勝負と闘めと決して角力に耽る事なく日々農事と勉強して家政と昔時に復さんと心に油断はあらずさけり。恁而一日の事なりしが伊之助は耕地よりありて頻りに挿秧となし居たるに間近なる畔道へ五十歳ばかりの女乞食が十歳ばかりなる男の子と伴ひながら來りしが小兒の癖とて七八間母に後れて道と歩行或ひは地垣に撞きと坐し少しも歩行の捗せらぬと乞食の母は見願く厳しく叱言と言ながら引立れと背ざるより竹杖搦て二つ三の小兒の頭首と毆据ながらおのれ是でも歩行すば百姓に遣て盡すと罵詈するの不憶なく耳に入たる伊之助が勃然と起たる意氣慷慨是ぞろの身と起すべき金針とこそ後の日におもひ合せて深きよき

第四番

古昔唐山秦の二世皇帝の時陽城と云處に陳勝と呼るゝ人あり少き時より大いなる志望あり去ども其家貧くして常に耕作の日儲と稼ぎ他にのみ使役れ居たり一日例の如く傭夫等と共に耕地に働き居たりしが馳て陳勝は隴の上に休み多勢の傭夫等に云るには我志望と得て立

派な人に成しても必らず其方達と忘れはせぬト吐息ながらに述ると聞きた多勢の甲乙は眼と
 見合せて唖と笑ひ貴様が天狗も古いもんだト口々に嘲弄され陣勝は嘆息し。何と胡笏な燕
 雀等いので鴻鵠の志と知んど大風呂敷と擔げたが後終に秦國と亡ぼさんと義兵と擧げ陳王
 とも楚王とも言れしは童子も承知の昔語り夫と是とは事變れど那の磯千鳥の伊之助は耕地
 にありて圖らずも耳に入たる乞食の言葉「おのれ是でも歩行すは百姓に逼て盡了」と聞ゆし
 一言胆に銘じ獨り情々思ふ様此世の中の人と生れし賤しき者の敵はあれど三度の食と他に
 乞ひ寒著に纏ふ衣服もなく朝夕住むべき家もあらぬ那を食より賤しきはあらざるべし其乞
 食にすら蔑視るゝ水呑百姓の淺ましき朝より夕まで泥田と捏て蚯蚓や蝶蜂のみ伍とすなと
 も奈何一生の樂あらん我も男兒と生れし甲斐に斷然鋤鋤の業と樂世に成出る方策となさで
 は生涯卑賤に終るの外なし今の乞食が一言は我身の爲の千載万論始めて夢の覺たる心地と
 一心凝てに却々に猶豫なさる敏捷の伊之助其夜我家へ販りて後其身と立るの思案と爲せ
 ど素より賤しき農民の亂世の時にありもせば那の中村の藤吉が萬々一の擧にも倣ふの手段
 はあるべけれど四海は至て靜謐に上徳川の政令も未だ壞廢ぬ安政時代侯伯各自門閥ありて
 卑賤と擧るの道もなく他に謀るべき術もあらぬは豫て好める角力もて上つには傾くつゝ



りし山崎家と舊の如くに鏡直し又一つには業と圖みて日の下開山の美名と得ば今の襤褸と脱すて、錦と纏ふの期ならんやト勇氣勃々自のら禁せず纏て老母と姉ありよに思ふ仔細と物語れ婦人は心せまきものもゑ容易くは承引す彼是と期と延て其年(安政六未年の)夏も過ぎ秋も暮て冬の中となりけり茲に下總の國布川驛といへるに金刀比羅の神社あり例年の十月十日氏子の村々にて大祭と執行ふと恒となし當日同社の境内にて必らず相撲の興行あり今年も誰渠が勘進元にて江戸よりは幕の内の森と始め幕下三段目の相撲と買來り部角力との取組あるの結構もゑ近郷近在の若者等は腕と磨き精と養ひ初日の妙法と待居たり然るに此相撲番附と製とるに付て一場の葛藤と起し愛憎偏頗の苦情の爲に一時は餘程の騒動となりしと布川驛にて有名の豪商三國屋某が仲裁に入り當時此地の博徒の親分上平の金藏などいへる顔役が双方と宥め漸やく其葛藤と解たる後上總下總の相撲と西の方となし江戸其外より來りし相撲と東の方と引分て番附と製へたり其時の大關は東の方森にて西の方は上總山なり(上總での角力なりと)既に此相撲の初日となり二日三日と興行あれど流石大關は大關だけ一日も敗と取す數番の勝と得られしにぞ江戸方は破竹の勢ひ當るべくもあらずして上總下總の西方は甚く面目と失なひたり然ればまた今日の相撲は頃日日の出の評判高き磯千鳥伊之助と森との取組と前の日よりの顔觸に看客は片唾と飲土加最良の田舎堅氣情願磯千鳥に勝せたいと土間も極敷も愈一同勝負如何と窺ひ居たる其精神の感じてや磯千鳥は不思議にも安々轟と倒したれば宛がら塙中は割るが如く暫時は鳴も止ざりけり斯る榮譽と得たりしより磯千鳥も歡喜に堪ず纏て興行果て後大豆谷村へ歸りしが此日角力の看客中に前年養子文五郎が我家にありて賭博とせん時同じ延に集り居て甚く伊之助に惱められし破落戸も雜りとり圖らず伊之助と見たりしのは養の遺恨と惹出し那奴が此頃の鼻柱と一番挫いで呉んものと一夜四五人膝し合せ大豆谷村の伊之助方へ不意に襲ひ入ると伊之助は驚きながら有合ふ火鉢取より早く破落戸等か面部と目蒐け發矢と投れば忽地に灰は四方へ飛散て黑白もわのぬ其なるより伊之助は飛で出手頃の棒と押取て再回家中へ歸り入當ると幸はひ難仆すに破落戸等は堪り得ず又もや今日も失措たのど逸足出して逃去たり

第五番

孝經に曰く身と立て道と行ひ名と後世に揚て以て父母と顯はす孝之終なりト却説磯千鳥伊之助は曩に乞兒が罵りたる言葉は常に耳にありて立志の念慮止む時なく斯くて何日まで此村落にとらんより將軍職の御膝下へ一日も早く出府して我こゝろ投す角力の業と天地に祈

りて勉強なば日の下開山の榮譽と得て父母の名までと世に顯し錦とのさりとて故郷に歸る期
 なのらすやと自ら奮ひ一日其身の決心と誰に告んと尋思とすれど家には拒む婦女ばより他
 に相談する人もなければ爨に其身の養はれし砂子村の伯父佐右衛門方に到り詳に志望の次
 第と打明け出府の許容と乞たるに日頃俠氣ある佐右衛門なれば一議にも及ばずして是と承
 引き留守の事より家内の始末何くれとなく懇ろに教へ諭して殊更に修業中の品行と誠め必
 らず心と殘さずして江戸に出なば勤め勵み立派になりて販り來よと勇ましき瞻賢に祝ひの
 酒杯汲のはし袂と分ちてのへせしのは伊之助も歡喜しく再回老母や妻に對ひいよく決心
 の趣と申し聞け是より江戸へ登りなば生死も知れぬ土俵の上投殺されて軀體のみ販つて來
 やうも圖られすいはゞ武士が戰場へ出向て往もみなじ事我本望の潔よく達せし上は御傳馬
 の御免の鞍に跨つて下總上總常野の國々關八州は魯のな事四國九州中國までも此磯千鳥が
 羽翹と伸し飛翔自在の身となるべし去ば目出度首途なり悦び吳よ歎く勿れと去年生れし幼
 子(伊十郎)の虫が知らすの泣出す哀別離苦のなしみと眼前見る苦しみも愛着心に釋然さ
 れじと氣と取直して我家と立出で親類縁者知音の家にとまると告て鹿島立しは實に安政六
 年十一月廿五日の早朝なりけり「風蕭々として易水寒しと口吟みたる荆軻ならねと住も訓

にし古郷に朝夕詠めあらしたる四邊の樹梢山川も暫時にわれを別のとふるへば最を磯千鳥
 翼も急に立のねて躊躇足に絆る飼犬心ありての尾と掉て前途と遮ぎる別離の情實に死別れ
 より生別れの哀しさは何に譬へん者もなきと有繫の伊之助氣と勵し江戸街道へと三里四里
 足に任て急ぐ程に此日は朝より空打曇りて寒氣は肌膚と劈くばより體て未の下りより六花
 さへ甚く降出たれば往來の人も稀なると思ひ疑たる伊之助なれば降來る雪と物ともせず打
 拂ひくして辛くも其夜は下總の船橋まで辿り着き何某とか云る旅舎に宿り翌廿六日の黄昏
 に始めて大都會の江戸へ着し豫てより心投したる阿武松の家と尋ぬるに深川御舟藏前大口
 横町との事なれば駒ね町々聞續けて漸やう其首に尋ね往し上總よりとぞ案内しぬ阿武松は弟
 子奴が取次來りて緯の由と大概聞てうち首領さ又しても新弟子の厄介者何は鬼もわれ大雪
 の道中に嘸のし草臥も爲つらん程に今宵は緩々那方に休憩せ明日の朝疾く面會せんとて其
 夜は一ト間に臥しめて翌朝磯千鳥と奥へ招き詳く來由と問尋ね更に伊之助に對ひて云様「
 如何にも汝が志望の程は一應殊勝に聞ゆれど抑々相撲の内幕はと苦しく憂き物はなし第一
 番附に登るまでは二年の場處と踏ねばならず前取、相中、本中、と番附下にも等級あり是と
 首尾能取越ても漸やく位置は上の口其辛抱と爲やうより農業に出精しなば家内は無事に活

計されうと説を諭せと肯入ねばさらば弟子入なさせんと更に玉蓋と取交し名と東海大之助
 と呼せけり爰に阿武松は式の如く弟子一同へ披懸となし猶東海に示教る様一世に相撲四十
 八手といへ是と正しく取分るは甚だ難し其古法に四の手あり頭と以てすると反といひ、
 手と以てするると捻りといひ、腰と以てするると投といひ、足と以てするると掛と云、然して此四
 手より十二手宛と出し是と四十八手と名るなり則ち(反)にも數の手あり向ふ反、居反掛反、
 寄反、傳へ反、撞木反、一寸反、うきはし枕、腕反、鴨の入首、くじき反、衣かつぎ、又(捻)にも
 數の手あり合掌捻、肩そのし、外無双、内無双、突落し、逆捻り、くじき、引おとし、出捻り、巻
 落し、頭ひねり、片手わく、又(投)にも數の手あり上手投、下手投、引投、上矢倉、下矢倉、首投
 からみ投、握り投、寄投、出投、手板の腹投、八柄投、又(掛)にも數の手あり二足掛、一本掛、
 内掛、外掛、手斧掛、泥障掛、呼掛渡掛、たぐり掛、のけもたれ、水掛、傳へ掛、此物稱に呼做せ
 と素より其名は實の實、業は氣變のなと處臨機の進退一身真狀其妙其味は言葉の上に見
 くは迷盡されず是は追々に試て角力の奥極と極められよと猶も古法古式と示し夫より我家
 へ止宿おさ日々稽古と勵ませぬ

第六番

精神一到何事の成さらん蟻のおもひも天までとやら偕も東海大之助は阿武松の弟子となり
 日々師匠や兄弟子等に怠たらず稽古と頼み一心不乱に勵むにぞ阿武松も只願成じ往々懸々
 の大力士に列する性と心の中常に恐れと懐きてとり。されば又大之助は角力社會の景狀と
 見るに各自初めは大關にも關脇、小結、横綱の榮譽と得んとて遙々の故郷と棄て江戸へ出師
 匠ととりて一二年夏と冬と過す中或ひは辛い勤めに長ぢ又は博奕女郎買に其辛抱と半途
 で挫き空しく故郷へ皈る時は股の横瘡と借金ばかり初めの志望も泥水の泡と消るの人多き
 と熟々見聞て我身と誠め寔に修業の悪魔といふは女郎買と博奕なり既に博奕は我家と顛覆
 すべき害ありしと目前に見し例もあれば自らら溺るゝ恐れもなし去ば是より婦人禁と名
 と成までは遊女場杯へ必らず一歩も踏入まじと神に誓とのけまくものしこき擁護と祈りて
 居り、されば又安政の六年も暮れ翌萬延元年も早晩に過去りて文久元年の春と迎へ今年は
 東海大之助が名と番附に願さんと春場所の興行と待に待たる甲斐もなく此年正月の事なり
 けん西丸御殿炎上して公儀の混雜一方ならず寺社奉行所よりは角力年寄共に妙法して力
 士一同の他行と止め且春場所の興行も公儀への御遠慮とて延引せしらば一同の角力は幾つ
 にも組と分ち或ひは神田、芝、淺草、と稽古相撲と興行す此時阿武松等は多勢の力士と一組

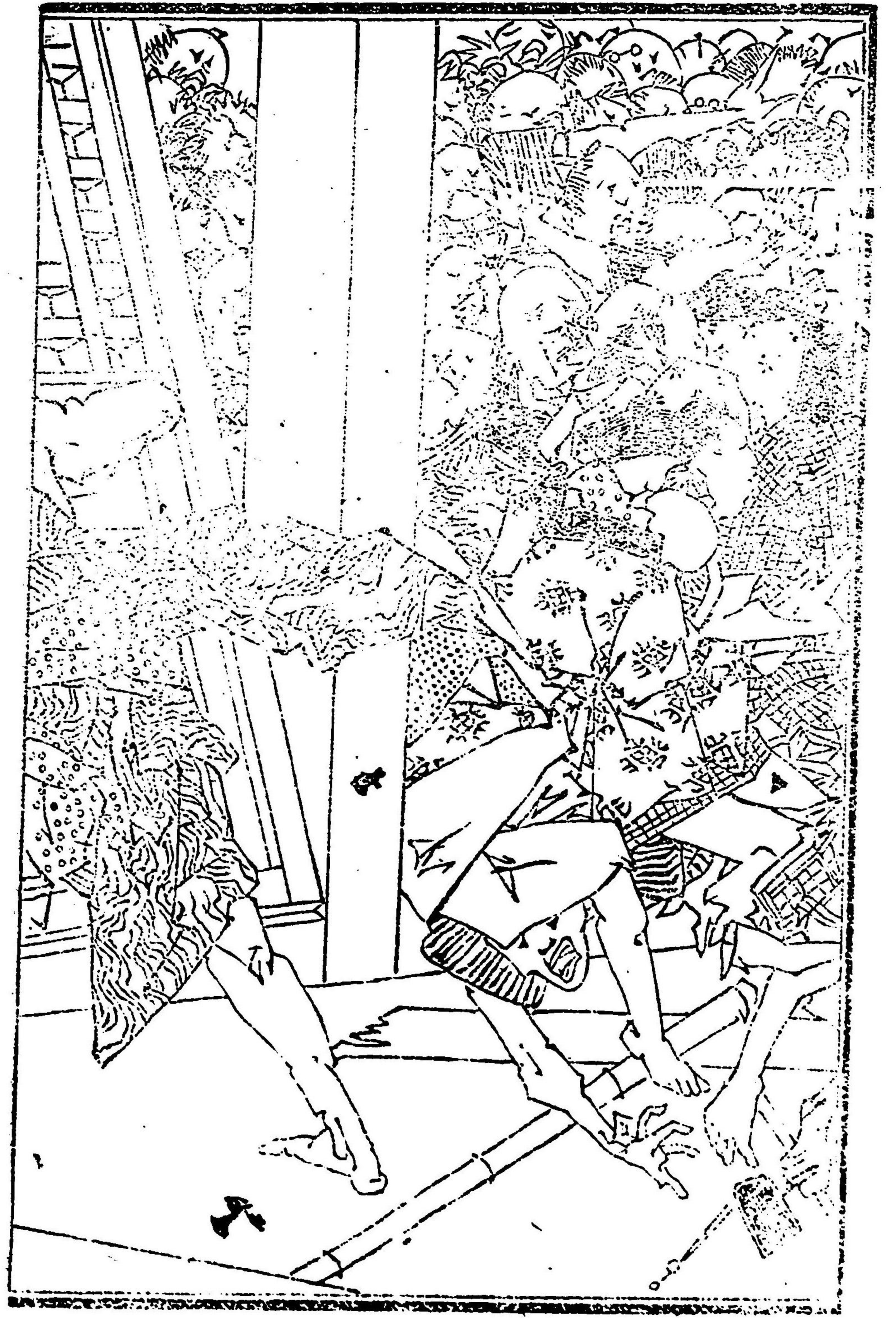
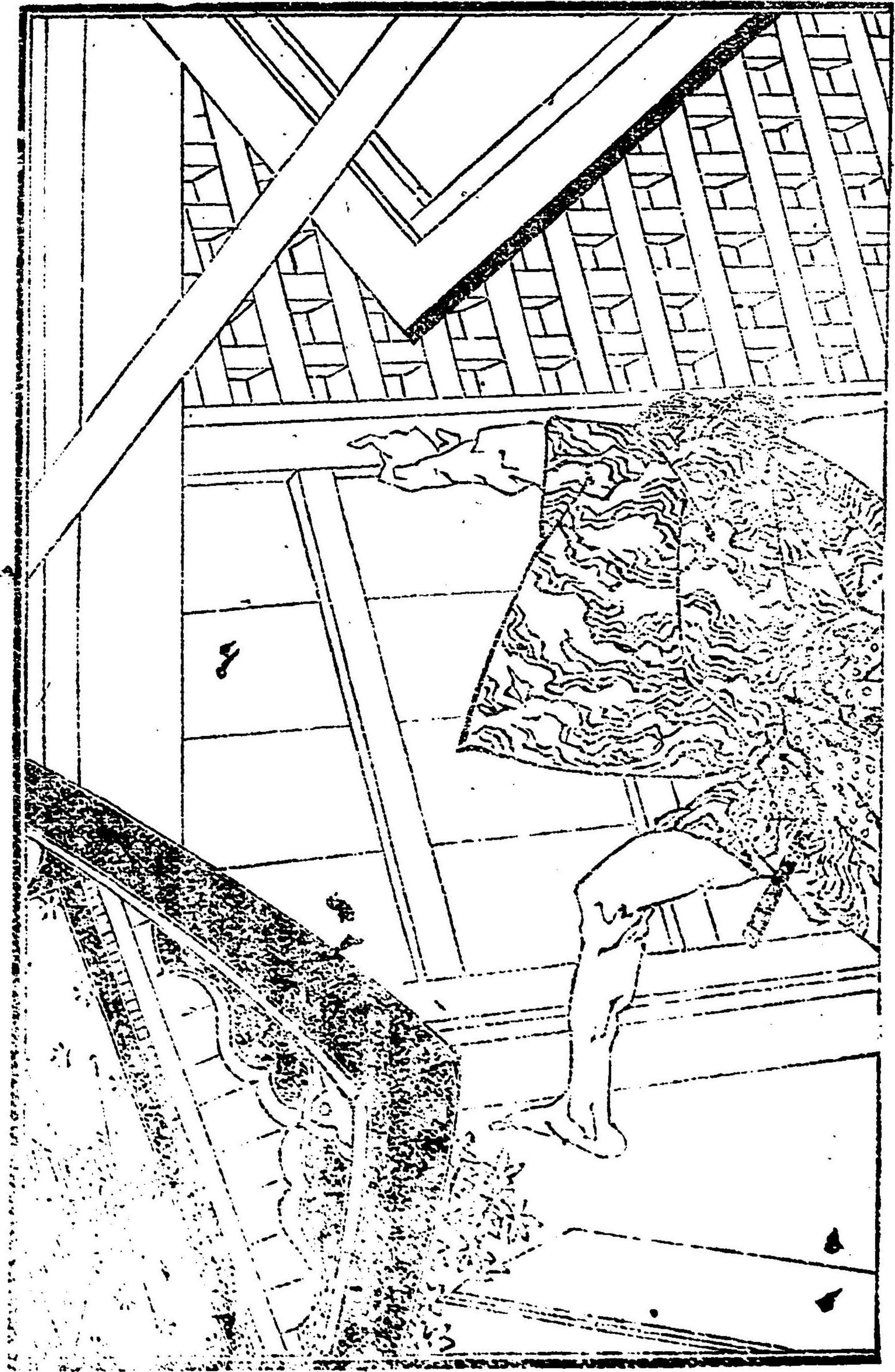
とし淺草觀音の境内に稽古相撲と興行するに日々の大入は宛がら潮の沸ごとく勝負と嘘す
 鯨波の聲は恰らも山の崩るゝばり最賑はしき景状なりし愛に一日の事なりしが其日の興
 行も果て後角力共は徒然の餘り或は茶店揚弓場と素見歩行其中に本中の角力取貫藤吉と千
 勝森何某は猿若町二丁目の芝居市村座の狂言と見物せんと連立て部屋より出で馬道の駈よ
 り曲りて猿若町の二丁目へ出市村座の木戸に至るに素より角力は樽元とて芝居觀物其外の
 興行まで見物料と出ざるが當時の習慣なれば何事もなく木戸を通り豫て設置の役棧敷(一
 名角力棧敷と云)へ通らんとせしに誰やら先に此棧敷に入て見物せし人あるより貫と千勝
 森は直ちに出方と招き寄せ何故ありて我等が棧敷へ見物と入たるぞ疾明渡せと番馬とと芝
 居の出方は嘲笑ひ小角力取と蔑視て急に二個の言葉と用ひず何と小頼な積鼻部かつぎと思
 口せしと聞尤り氣早の二個は憤乎と焦燥立良々汝等今ぬらした一ト言と自がら覺えて居や
 アがれと屹相して馳らへり所々に止宿の部屋くへ斯と荒増と報じ遣り後刻ともいはず思
 より直二丁目の芝居小家と粉名徹座に打毀さんと獅子奮迅の猛勢に煽起られ何らは擬議せ
 ん血氣に逸る力士ども此は面白しと事由とも質さず各自身輕の急仕度相中本中は申そに及
 ばず上の口上二段三段目幕下の角力まで手拭ともて糾鉢巻とし太さ廻もて櫻に絞どり勢と

揃へて市村座の木戸前へ動と押寄木戸口に並居る出方と磔の如く投脱けて矢庭に土間や棧
 敷へ踏こみ支へる奴等は此の通りと拳と揚て撃据く容捨もあらぬ狼籍に看客の老若男女
 は夫と見るより騒ぎ立ッレ打こわしと疾速よと壯は老と扶け掖さ老は小兒と矜はり連れ逃
 んとすれど入口よりは追々角力の繰入て曳々聲に暴回れば常さへ狭き裏木戸の其混雜は一
 と方ならず或ひは壓れて倒るゝあり又は狼狽て怪我するあり今まで笑ひ樂しみたる愉快の
 景状ひさのへて修羅の巷と忽地變々悲鳴の聲は外に洩て叫喚地獄も斯はあり恐るしなんど
 云ばありなし去ばまた俳優ども、舞臺より逃去て各自髪と脱間もなく衣裳のまゝに裏茶屋
 杯へ隠れて容子と窺ひ居たり霎時ありて土間棧敷の看客は殘らず逃去り跡には坐布團酒肴
 の器具茶屋くの煙草盆のみ斯ては最早邪魔はなし卒家棟から奈落までおもひの儘に破毀
 せと四五十人の若者原各自土間の桁引外し當ると幸ひ力に任せ縦横無盡に建立る其折しも
 われ土間棧敷の諸所に仆れし南草盆の火は敷物や布團へ移り追々次第に廣がりて既に大事
 に至らんず危ふき場合に至りしのも誰とて是と鎮める者なく唯此まゝに打棄置なば市村
 座は申そに及ばず猿若町の三座は勿論數百の家屋は一朝に灰となるべき有様に裏表の茶屋
 は更なり三座の座元出方まで安さ心はなりのりけり忘る處へ遅れ走にはせ來りし一個の力士

は是なん阿武松庄吉が門弟中にて頃日取手の名と得たる東海大之助なり此体と見て打驚き
 飯令市村座に怨恨ありとも外の芝居や茶屋小屋に怨恨のあらう筈はなし何は兎もあれ燃出
 した此火と早く鎮めずば事は大業に及びなん少しも猶豫の場合にあらずと他には構はで我
 一人芝居の前にある用水桶と引提げ烟の中へ投込く意外に出たる働らさせしと心ある人
 は見遣て竊のに舌と巻居たり

第七番

去程に此騒動は忽地四方へ傳播りて早くも相撲年寄の耳にも入れば開は等閑に棄置がたし
 疾々場處へ出張して詳しく出入の事由と質し此方に無理のない以上は立派に相撲の規模と
 正し必らずとも組合の瑕瑾にならぬ談判せよと當時の頭取より指揮に寄り心利たる年寄
 共急ぎ四五人出張し且見るに市村座の芝居の中は黒烟り立捲ひて踏入るべくもあらざる景
 状四下は老若うち集ひて其騒動と見物しされば四五人の年寄どもは霎時其首に隣隣居しが
 然とて際限もあらざれば牒し合せて愈一同芝居の中へ急迫しく籠入り大聲揚て多勢の者
 漸々に取鎮め兎もあれ淺草の地内まで引揚よと説諭の折柄爰に其頃江戸中に此者ありと知
 られたる一個の機客新門の長五郎は乾兒が報知に此騒動と聞込て見棄もされねば乾兒と認
 れ自が住居に程遠のらねば積者町二丁目へ赴きしが此時幸ひにして相撲年寄の出張せし際
 なりし故好機會なりと芝居へ立入り共に多勢と押宥め漸やうにして淺草寺の地内へ一同引
 取らんと暫時騒動も鎮まりけり茲に又東海大之助は燃立猛火と我獨り必死と消は止たれど
 も其中年寄共は出張して多勢と引て飯られしが後には座元其餘の者ども今日の亂暴と甚く
 怒り早々町役人に是と訴たへ相撲報の不埒の所業と町奉行所へ申立んと相談中なる趣旨と
 竊のに聞て打驚ろき若も奉行所へ訴たへられなば忽地爰へ捕方の對ひどるは必然なり其時
 此方に一人一人の隠接なせべき者も居らねば假令十分の理分ありとも枉て非分に陥んも知れ
 ず好々我にも一ツの膽あり今若百萬の捕方が對ふとも死ともて敵する分別あらば何の恐る
 事あるべからずト大胆不敵の度胸と据ゑ芝居櫓の其上へ動平と坐して大音揚げ「今日此
 芝居と破毀せし相撲組の發頭人は斯云東海大之助なり多勢の者は引取るとも我一人は爰に
 わり何なりとも持て來よ敵手にならんと云終り悠然として四下と睨まへ待構へたる形状は
 人もなげなる舉動なりさればまた二段目以下の相撲取等は思ふがまゝに怨恨と返し猶飽足
 で働らさ居たるに年寄どもと新門が仲裁に入ての説諭しに一同淺草寺地内へ引取頭立たる
 相撲より今日の始末の一伍一什と新門に物語り市村座への談判と任せて以後は部屋くへ



各自罷りて其沙汰と油断もなさで待居たり然れば新門辰五郎は先相撲頭取に面會して仲裁の任を受け更に市村座の座元に逢て種々談判に及びたるより忽地に和談と遂げ双方無異議趣旨と通じいよく明日は改ためて和解の宴と開くべしと漸々事件も鎮定せり急る場合に至りしるば市村座の出方共は檜の上に前刻より東海大之助が控へ居ると座元へ夫と通せしにぞ座元も大いに驚きて早々新門へ通達し和談の趣意と説示して漸々東海と引取せ其翌日は此手打とて江戸中四十八組の威頭は一同挨拶にと淺草地内へ出張し遣ひ物として相撲組へは酒樽と積重ね見舞として市村座へは大蒸籠の蕎麥と贈る其全盛は徳川の未世に驕りし人心ちると惜まぬ花も香も後世の名残となりけらし（因に云此時新門辰五郎と市村座の座元并びに相撲一同へ贈りたる蕎麥は猿若町三ヶ町より田町、馬道、花川戸、孰れの町も買盡して蕎麥屋は非常の利潤と得しと聞たるまゝに記し置のみ）去程に東海大之助は誰云となく市村座の芝居にありて非常の働らきとなしたりとて其評判も最高く殊に破竹の勢力あるもゑ知る人は是と知て大いに稱賛なし居たり爰に一日の事なるが吉原京町一丁目の鰻屋店梅川の若い衆は一封の手翰と携さへ東海大之助と尋ね來り今し何處の御方なるの御來臨なると此手紙と持て往けとの急のか使ひ直に返事と貰ひ度とおもひも寄ぬ事柄に東海は不審と抱き何事なるのと封押ひらき見れば一筆のはしり書鳥渡御目に掛り度い間是非く此者と御同道與々待上いと名當は我身に相違なければ迎ひに寄越せし其人の名と記さねば誰なるの少しの心あたりもなし去とて是と否みもされねば其若い衆に誘引れ淺草寺より反敵と過ぎ彼不夜城裡へ入山形有葉は花のよし原丈左右の茶屋は萬燈に巷街と照して眼も眩く自づと氣も散り心も浮きて他談やましき風情あるは都の人の常情なると獨り東海大之助は囊に婦人と禁せし一心堅く守て動さるやらず花の香さそふ梅川へ伴なはれてぞ入にける

第八番

金衣公子のしらべも深し竹の奥。偕も東海大之助は招きに應じて梅川の二階に昇りて窺へば未だ見知らぬ一個の客人待詫し氣なるおもちして盃舉て居たりしと夫と見るより急に聲懸け上座と譲りて東海に就しめ先初對面の口誼も訖り更に玉盞と毒めて云やう。關取には今宵の迎ひと嘸し不思議と思はれなんが今關取と招きたるは我身變の日信若町二丁目目の演劇見物に往つる時圖らず遭たる那騒動始めの程は吃驚せしが各自表の芝居茶屋にて見物なせし群に入り霎時詠め居たる折風と目に觸しは關取が他には少しも頓着せず燃立火中に踏込で能消止た非常のはたらき如何にも感服なしたるもゑ今日は辱知の盃せん爲能

々此首へ迎へしなり寛々敷献と傾けられよと賞美の語に東海も心の裡に深く喜悦び厚く謝言と陳たる後更に客人の姓名と問に再回對へて云るやう「我身は泉州岸和田在堀村の砂糖問屋岡村藤右衛門と云者なり糞の年商賣上の大損毛より故郷と去て江戸へ出で今は此吉原の小店高田屋の若衆に住込み名とも伊助と呼替たり素より展しき勤めとは覺悟の上の今の身の上さりとて何時まで他人の下に逐使はれてのみ居るべきと纏て花咲春にも逢ば世に香ばしく名乗も會なん失禮ながら關取にも後年のならず士俵の上に著るき名と四方に發し相撲の榮譽と揚んこと鏡にのけて見るが如し猶此後に要事あらば淺草田町二丁目の松葉屋と云引手茶屋あり是へ遊びに來られよと懇談數刻と過せし後其夜は分袂て歸りしが此伊助と唱ること現時根津須賀町に九匠五郎の娼樓と築き三千の遊女と養なふて萬客の嬉遊に備へ日夜の全盛新吉原の五大樓にもとさく劣らぬ花柳巷裡の阿房宮八幡樓と呼傲す者なれば近年高砂浦五郎(曩の東海大之助)が數度の厄難に逢たるとも舊時の交誼と忘るゝ事なく任俠ともて是と助け大いに力と添えけるは實に得がたき男兒なり閑話休題彼の虎と雀に搏にし龍と双手に挫し々猛勇豪氣の大力士も生者必滅の無常は遁れず爰に文久三年の秋九月當時相撲中に屈指の名ある三代目阿武松庄吉は二豎の爲に敗と取て果敢なく此世と

遊奕たるものゝら門弟中は力と落して甚く悲歎に落たるが斯て有べきに非ざれば厚く葬式の禮と擧げ以後に門弟中協議の上松ヶ枝喜三郎は師匠に就ての古顔と云殊に温和なる性質なればと歎て阿武松の言葉によりて松ヶ枝と千賀の浦と更めさせ相撲年寄と爲したる上先師の弟子と一同引受け確く取締となせしと云去ば東海大之助は夫より千賀の浦の世話になり益々稽古と怠たらねば其翌元治元年の春場所の上二段の相撲にまで出世と爲し此興行終りて後千賀の浦喜三郎等と共に東北地方へ稼業に出で諸所の興行に日と消り今越中の富山より加州金澤の市中へ乗込爰にて大相撲と催との筈なりしに此年六月廿三日長瀨の國老頼原越後等主君毛利侯父子の爲に進奏する處あらんと伏見番邸に抵りし折柄股藩の士四五百名が山崎の寶寺に屯集せしにぞ京師の騷擾大方ならず終に薩摩土佐久留米の三藩建論して之と討たんと請ふ長人等竊に其手配と謀ひ知て京師と襲ふ(大略)此時にありて金澤藩にも飛殿あり四面の國境には關と構へて漫りに他國の人と入らず又國中に寄留の甲乙は悉く取糺して聊の不審あれば容赦もあらず搦め捕て獄に下せと取沙汰するより千賀の浦は打蕪るき取ものも取敢ず其身の故郷越前の國三國港(現今は坂井港と云ふ)と遁れ去りしに餘の相撲等は周章狼狽各自當惑の眉と顰め必死と潜伏場と索ぬる中是も千賀の浦の門弟中

にて彌高山萬吉と云る者は幸ひ金澤在四十萬村の生れなるより東海大之助と袖ヶ浦留吉は彌高山に誘はれて同處に潜伏なしのたり然るに又長州生れの相撲取青海山何某と常陸生れの鹿島山の兩人は能登生れの貫藤吉(先に市村座破毀の騒動と引起したる發願人)と共に貫が故郷能登に潜れてゐたりしが青海山は長州人なるの嫌疑と以て金澤藩の爲に捕られ又鹿島山は水戸浪士蜂起の折なれば是も嫌疑と以て召捕れ兩人金澤へ護送れたりと觀しく途上にて實見せし小野ヶ原(舊彌高山の師匠と云ふ)相撲年寄より遂然に彌高山の方へ急報せしにぞ東海等も甚く驚ろき斯ては爰に居るも危し去とて遁るゝ道もあらねど越前の國三國港には千賀の浦親方が居るべければ那方と投て落往んと兩個(東海と袖ヶ浦)は手早く用意と爲し挨拶倉皇彌高山が家と發足なしたりけり

第九番

斯而東海と袖ヶ浦は四十萬村と發足し本街道は危ければ間道よりと往方と定め平走りに走る程に生憎埃日の雨降つゝさ遠徑は濡りて足と停めず又山間の溪川は出水の勢矢よりも激く其困難は一ト方ならず唯尋常の者なりせば進も得ざる危険の道路と血氣盛んの兩個の力士は曳々聲して難處と踏踏を漸くにして松戸川の渡口まで到り若しが此川もまた出水の

爲に川止となりたれば兩個は互ひに顔見合せ必至と常感したれども去とて後へも引返されねば共に游泳て彼岸へ越んと決心なして赤裸となり衣服と帯にて引括り頭上へ乗せて潔よく逆巻流れへ飛入しが名に負ふ松戸の急流なれば兩個は見るゝ押流され既に危ふく見えたりしが神の冥助か幸ひに四五丁の末流に至り兩個は辛くも前岸に流れ寄九死の中に一生と得たりしのは迭みに再生の歡悅と言合て猶も歩行と急ぎし程に其黄昏の火ともし頃加州大聖寺の新關にさしゝれり素より急場の旅行にあれば東海も袖ヶ浦も豫て關所の切手と所持せず如何程事情と述ると雖も關所と預める役人等は此頃の事變と聞て油断なければ肯も入す堅く通行と差止なれ愈々兩個は途方に暮進退維に谷まりしが最早此上は奇計と以て關と踰るの外なしと東海は袖ヶ浦と謀し合せ竊らに關所の裏手へ廻り廁と覺んと請入しに其首には五十あまりなる小使様の老爺ありて兩個が難義の景狀と見聞に猜しめる容子に東海は胴巻より一朱銀二個と取出し密と老爺に袖の下内々委囑は打はゝゑみて裏の戸口と押開き盜が則ち規則の間道役人の目にゝらぬ中疾々道と急がれよト指し示と情の下謝禮の言葉も忙はしく其間道より進みしが夜は暮果て黑白もわらす雨さへ頻りに降ろゝぎ殊に今朝より食事もせざれば飢渴くもあり身体疲勞て堪がたきは山々なると堪へ忍びし千辛萬

苦漸やくにして越前なる三國の港に到着し千賀の浦等に面會せし以后此處に雲時逗留中
 に諸方へ竊み居たりし此組合の相撲せり、追々に聞傳へて同處へ集會り世の鎮靜と待居る
 中豫て金澤藩へ召捕れし青海山と鹿島山も疑がひ晴て赦免になり是さへ三國へ來合せたれ
 バ千賀の浦も漸やうに安堵なし先づ第一番に同所にて興行せしが久しく途切てありたるも
 のら人氣も立て景氣よく大入と取たるより續て福井武生の邊と滯はりなく興行し稍東國
 へ歸る道筋猶世の中は殺氣がりて全たく平穩に至らねば先觸宿割の役々も唯尋常の相撲に
 ては爲し難のららん千賀の浦は誰渠と撰む中圖らず東海大之助と見出したれば是こそ大丈
 夫の相撲なれと直ちに東海と先觸の役に充て信州路へと差のれり爾ば東海は毎日他の相
 撲より一日先に旅舎と發足一夜信州善光寺の旅人宿信濃屋と云るに止宿し時不圖相客に成
 たるは西山八兵衛とて生産は上總の人なるが當時北越地方の米搗人と周旋する業と營なみ
 居る趣さにて互ひに同國の人なれば忽地に懇意になり種々の雜話に夜と明して翌日も又兩
 人は信州追分まで同道し同驛の旅人宿油屋助左衛門方へ宿りしが其夜西山八兵衛は旅中の
 鬱と暗さん者と酒肴杯取寄て東海と共に盃と傾け稍心地よく酔たる時此家に豫て抱へある
 女郎と買て娯しさんと下婢に夫と命じやりしが如何なる事の間違なるの此家の若者等は紙
 問の蓋にて何か頻りに八兵衛と罵しりあへると聞よりも八兵衛は案措がたく早々若者と招
 き寄其事情と語り問より茲に一場の騒動と惹起その趣むきは次の條と看て知るべし

第拾番

如何なる事由の間違ひなりしや頻りに油屋の若者等は西山八兵衛と嘲けり諷り聞に得堪ぬ
 其場の旨義に東海は不審と抱き内々八兵衛に尋ねれど少しも彼等に關係せし事なき由と答
 ふるものゝら更に疑がひ解やらず其中娼妓の顔出しとて其場へ暫爾來りしが是さへ忽地坐
 と立て逃るが如く引退ぞき其後は絶て顔とも出さねば流石の八兵衛立腹し急に若い衆と打
 招き何故ありて前剋より我身と惡さまに嘲弄なすぞ何の仔細のある事ならん、あらば疾々
 茲にて進よと嚴しく談じ付られて其場は低頭平身し狐鼠く、賠話て逃去しが猶こりすまに
 諄々と此方の事と罵る様子に側聽する東海は堪り難ね猶番頭と其坐へ呼寄せ問を質せと腹
 味に言葉と濁して埒明ねば去ば主人に面會して旅人の我等と輕蔑せし事由と是より糺すべ
 しと共に其坐と立上り興と目覷て東海、西山、鷺々地に往んとすると遣じと支ゆる若者等兩
 個と中に取圍みて拳と以て打擲するにぞ東海は勃然と怒り、汝等客人の我等に對ひ無禮と
 拵了上らるは最早容赦も成がたしサア此上は腹どの談判敵手になるなら何匹でも頭首の鉢

の割は様籬でも籍て出て来いト西山八兵衛と背後に掩ひ那方と闘んで身構へたる其騒動に
 奥の間より顯れ出たる此家の亭主仔細は何の分明ねと亂暴人と聞たるゆる大聲揚て下知せ
 る様、客は生若へ噴鼻揮のつぎナニ如何様の事が有らう奇て集つて怪我せぬやう袋たゝさ
 に爲て了と勢はひ込たる景状に東海はせゝら笑ひ噴鼻揮のつぎが鉄の腕受けられるなら
 受て見よと恰るも猛虎の群羊と驅るに等しき血氣の振舞當りがたくぞ見えたりけり然れば
 また此騒動と聞付て多くの旅客は打聽るさ上と下へと混雜すれば此事早くも村役人の耳に
 入り容易ならずと出張し那方此方と押宥め喧嘩の原因と擇ぬるに是は全く油屋の若者等
 が人違ひにて西山八兵衛と誹謗したる委細の事由判然せしるば主人助左衛門も裏に輕々敷
 下僕どもに指揮して東海等に抗敵たると大きに悔ひ只願村役人に委囑て八兵衛と東海に詫
 入たるにぞ出入は忽地に鎮靜りて更に和解りの宴と開き多くの藝妓と打招きて互ひに隔意
 あらぬと示し踊りつ舞つ歡と盡して主客水魚の交誼と通じ又八兵衛と東海は茲にて兄弟の
 義と結び猶再會の期と約して翌日同驛と發足しぬ」恁而東海大之助は興行先の國々にて數
 度の艱難に遭たれども辛ふじて是と遁れ新師匠の千賀の浦と諸信に滯ほりなく江戸へ着し
 は元治元年の十月末なり去ばまた千賀の浦は今度加州にて東海が機轉の舉動千辛萬苦と事

どもせぬ濃氣の膽略あるを見て幾つ年の市村座破毀し騒動の緯までも想ひ起し彼是と察と
 るに後來渠奴は天晴なる大力士と成可ものど心中深く東海と愛慕ひ猶朝夕に厚く世話なし
 終に其身の前名なりし松ヶ枝と云と譲り一日大之助と打招き竊に語り告る様、見らるゝ
 如く先師匠阿武松が死去せし後は我身が一同の弟子と引受取も直さず師匠の跡と相續なし
 ては居るもの、最早我身も年の上殊に子とては娘一人男ならねば此家と相續さざる譯に
 往ねば思ひ込たる和主が伎倆未頼母敷其身体と我身に任せて此家と相續しては吳まいのと
 意外に出たる懇談に松ヶ枝は困じ果兎角の返答も急には出さず執れくど期と延せしが夫よ
 り後は千賀の浦が朝夕迫りて止ざれば爰に始めて肚裏と決め其身の素性出府の來歴故郷の
 事杯詳細に打明け其御深切は勿体なき迄難有けれと前の始末に及びし時實は凄なるおたき
 と云と表向は離縁なせども見まで舉げし夫婦の情此大之助が立身しなば昔時と忘れず再び
 迎へ舊の契約は變べからずと殘せし言葉と証となし其後聞はおたきには節操と守りて身と
 慎み他に委託て江戸へ出筋違内なる土井様の奥女中に奉公住此身の出世と待居るよし風の
 便りに聞て見れば義として之と去れませうと假令妻女と迎へすとも故郷に一人の老母あり
 是と養ふ兄弟なければ往々我身の望み足なば他百倍の孝養と爲んどおもふ心の木枯すまで

切なき身の上なれば今更他家と相續し先祖の祀と絶のみならず老母や妻子へ誓詞と變るは如何も忍び難かる事情深くお察し下されと洎と共に物語ると熱々聞て千賀之浦は殊の外感歎しいよ〜松ヶ枝が義胆と賞して情あつく是と待遇養子の事はおもひと絶ちて其後娘と何家への縁と求めて嫁せしめたりとぞ

第十一番

往昔すまひの勝負に争ひとなせし時木村何某といへる行司が、雪は折らん竹は折れじとつもる間に風吹はらふ志のゝめの空、といへる古歌と引もちひて左右となだめけるとかや寔に土俵の上にありては鬼神とも揺ぐべき猛勢と現はし却々に制しがたある形状には見ゆれども相撲取は世に優しく柔和なるものはあらざるべし茲に中古上寛相撲ありし時の土俵の古質と繹ねるに先四本柱の間三間四方柱より柱までの内土俵七俵づゝ合せて二十八俵と環すは天の二十八宿に象り東西南北の四本柱は須彌の四天と表せしなり丸土俵數十五と内に布は天の九星地の六極に比し東西に相合は陰陽和順の理に因なり去ば土俵の内と大極と云左右の入口と陰陽といひ仁義禮智信の五常と守りて法に適ふと式となすとぞ堂々々々しき事ならんや閑文字休説て那の松ヶ枝鶴之助は元治元年暮の場所にも至極の出来に出世な



し明れば慶應元年となり此春場所も花々敷取揚しと播州姫路の城主當時の御大老たりし酒井雅樂頭迄の、聞し召れ一日御家臣に仰せられて有名の相撲取と其邸中に招かせられ親しく取結びと御覽あり其時同家の御掛りは御奉行芝田佐内勘定奉行は古市藤之進、周旋方は綿貫淑三草刈庄五郎の四名にして當日召に寄て伺候せし相撲取は伊達ヶ關(後に相生、又綾瀬川)藤の戸、伊勢ヶ濱、高越山、東灘(後に手柄山)鹿島潟、四方山(後に境川)北の浦、三村山、鯨の海、小柳、松ヶ枝後に(高見山)等にてお好に寄て數番の勝負あり終に其日お抱へに成たるは四方山(境川)伊達ヶ關(綾瀬川)松ヶ枝(高砂)東灘(手柄山)北の浦(兜山)の五名なりし去ば松ヶ枝鶴之助は姫路侯の御抱へとなり君侯より高見山大五郎と名と賜はり殊に時服等と拜領せしのは大五郎の歡悦大方ならず厚く恩誼と謝し奉つりて愈々堅固に精神と籠め益々業と勵みし程に慶應元年の春場所も花々敷取上て其後姫路侯の上院相撲とも果し市中一二ヶ所の興行終り其年の六月下旬千賀ノ浦の一組と共に常陸國府中驛へ興行に出んとせし其出立の前夜に當りて大騒動と惹起せし其原因と什麼と云に爰に高見山大五郎が愛顧の客に上總の國長柄郡茂原驛の豪商丸屋庄右衛門(通稱丸庄と云)いへる人あり性質相撲と甚く好めば此年の春場所より江戸に出て滞在し常に大五郎方へ出入なせば道回常陸

へ發足と聞き一夜大五郎と伴ふて一時なれども談別にと新吉原仲之町の茶屋に遊び戯れ間の大陽氣浮たゝの大盡騒ぎに其夜も更て九ツ過高見山は口と開いて餘りに時刻の遅ならはぬ中去來御歸宿と促がすと肯ねと強て説とめめか近いうちにと聞棄て大門より土堤へ踏出し徐々歩いて往こそ宜れと駕籠にも駕で馬道へ差のゝりたる折こそあれ人殺しくと頻りに婦人の泣叫ぶは尋常の聲ならず頃日の物騒沙汰或ひは被刺の物盗か何にもせよ近寄て容子と見んと足早に進み往て窺へば年の紀二十二三の美貌婦人今しも四五人の浪人に手取足取り引据られ叫き號べと耳にも達す婦人が帶と引解さつ猶衣服まで剝取て紅袴一重と成たる上是とば互ひに強姦せんと既に危ふき其体と見るに忍びぬ大五郎は豫て豪氣の性なるも悉竊かに丸庄と片邊へ忍ばせ恐喝て那等と追散さんと大喝一聲顯れ出「汝等能も人と恐れず往來の人と惱ますよ十通りあゝッた高見山が双の拳と受て見よと勢ひ込で威し被れば有繋無頼の悪漢原も一時は恟々と打驚き均しく此方と見願りの各々身構へなしたる間に捉へられたる其婦人は力に任せて身とも離ち漸々其處は遁れても身體と蔽ふ衣服もなければ遠くへとては逃のれず半丁ばかり那方なる路次の裡へ潜み隠れ呼吸と殺してゐたりけり去ば又浪人原は衆と頼みの虚勢と張り各自刃の鯉口くつるげ寄は斬んと致闘ながら敵

手と見れば高見山の外に一人の影だに見ゆねば忽地眼と眼、口々に「ソレ田中氏横山氏渠奴は火伍もない容子邪魔ひろいだ今の返報息の根止ておやりなされヲ、合點と抜連て斬て蒐ると見るよりも高見山は心の中渠奴等と茲にて闘ふは寔に名もなき無法の喧嘩畢竟我身が此處に不圖求めて陥入しは婦人と救ひ出さん計り爾るに婦人は幸ひに危ふき虎口と遁れ去り我身の望み叶ひし上にハヤ此奴等に構ふは無益、とはいへ最初の勢ひに似ず此まゝ茲と引退ぞかば渠奴等に身性と笑はれん如何なさんと尋思も待て白刃と振て斬付る傍若無人の舉動に高見山も禦ひ難ね四五歩後邊へ退ぞきたり

第拾一番

無頼不逞の浪士原遊たる婦人に目も蒐ず五人均しく高見山へ斫て被れる遽然の場合に有豪氣の高見山も五六歩後へ引退ぞけば彼奴は愈々勢ひ猛く足と揃えて破亂くと突出したる長芒穂先は月に輝きて最も形もさ刃の中大五郎は家塾店と楯に取つゝ立掛たる技藝と急に引被て退ぞきながら手頃に卷是と双手に振回して縦横無盡に竝立つ臂力に彼方の浪士原は忽地ハツと色めき立以前の虚勢何處へやら前なる一個の白刃さへ赫落されて逃出せば後なる輩も怯氣づき放屁腰の支へ立互ひに他のみ憑依として暫時は挑みわたりしが猶も手乗

き舉動に又一人と遊仆され我と我身の白刃にて金瘡を負し景狀に早叶はじとや思ひけん迷みに夫と眼配せして右往左往に逃散たれば高見山は吻と一息猶も四方へ氣と配り油断のらざる背後より丸庄は立出來り高見山に聲と被け「關取最早大丈夫だいやまう實に危険事斯云處へ永居して如何な危難に遭ふも知れぬサア」疾く歸らうと促がし立てゐる處へ最前彼方へ逃隠れ怖々ながら此方の容子と窺ひわたる那の婦人は齒の根も合すわなくと戰慄なるらも浪人原の影の見ゆねに少しく安堵し裸体の儘に立出て高見山と三拜し「何とお禮と申さうやら言葉に盡せぬ今宵の始末命の親の關取さま御恩は死ぬとも忘れませぬト兩手と合せて幾回か伏拜む婦人の顔高見山はすのし見て「爾云おまへは柳橋の岡田の阿姐ぢやア有ませんのと聲被られて婦人も吃驚此方と親く打視やりて「松ヶ枝關（高見山の舊の名と呼たるなり）で有ましたらと再回驚く不思議の對面側聞せし丸庄も夫と見て「ろんなら今の難義に遭たは關取の懇意の御方の圖らず救ひ援はれたも互ひに盡ぬ御縁であらう何にいたせ和女さんに負傷のないのは勿怪の幸ひ夫にしても其体では如何する事も出來まいト囊に剥れし婦人の衣服と丸庄と高見山は那處此處尋ね回せども那浪人等が持逃しる更に見ゆねば強ては尋ねず丸庄は羽織と脱て是と婦人に引被させ兎もあれ今宵は兩個とも私の

旅宿へ来たが宜と伴ひ連れて往折柄豫て丸庄が乗付の大傳馬町の赤岩(赤岩)の若衆は北里
 へ標客と送つた歸道空駕と釣ての通りありに丸庄は目早く呼止め標の下より拾り紙婦人
 と宿舎へ一ト肩委囑と云とも待の二ツ返辭、辭退するとも肯ずして駕せる間疾く昇揚つ
 橋町へと駛り往く」中古誰やらの附合に「厨房に麒麟の鮨の無ばあり」と云るへ「位牌
 が口とさるば勘當」と附たりとの夫は一家の上とは見ゆれと延て國中騎者に耽りし徳川末
 世の景状は回顧だに形なく暴客白晝に横行して市民は安さ心もなく公儀に賄賂おこなはれ
 て政治に依怙の沙汰と生せり寔に徳川の祖君たる家康公の聞し召ば前の附合の短句ならね
 と御勘當もありぬべし有恚洗季の世の中なれば市中に無頼の惡漢潜みて常に良民の婦女と
 盗み又財寶と掠むる杯枚擧に違あらざりけり去ば高見山と丸庄は路次にて救ひし婦人とは
 赤岩の駕籠に駕せ橋町の旅舎へ送らせ後より兩個歸り往て無事と祝ひの悦び酒宴互ひに酔
 と盡して後有警俠客の大盡客其夜の明ると待詫て婦人の衣服と整へ遣し夜前の始末と云合
 めて旅舎の男に送らせ遣りしは最も殊勝の話柄にこそ开も此婦人は兩國 柳橋同朋町なる
 岡田と呼る待合茶屋の親屬の者にて實家は淺草山谷堀にあり夜前も山谷堀の實家へ往て心
 細くも唯獨り柳橋へ飯らんとて馬道まで來ありしに偶然邂逅し五人の浪士突然夫と見る

よりも立塞がつて道と通さず終に手籠にせらるゝ處と天の助けの幸ひにも高見山に救はれ
 て其身は辛くも無事と得たるが岡田の家へは高見山が豫て最後の客と共に折々往たる其時
 に見識同志の婦人の危難と圖らず助けし豪氣の舉動有し次第の一伍一什と婦人が飯宅での
 物語りに岡田の主人は殆々感じ早々自から橋町なる丸庄が旅舎へ赴き厚く謝禮と送たる後
 強て丸庄と高見山とと其家へ招待し酒肴と呈して是と發應深く懇儀と結びし由有爾ばまた
 高見山は夫等の事故に妨げられ新師匠の千賀ノ浦等と常陸へ發足の日限も一日後れとなり
 たるにぞ其日の午刻頃丸庄に告別とつげ路次と急いで追苑往き府中驛にて其一組に行違ひ
 たるにぞ同地の興行も景氣能打納め猶在郷諸所と興行して慶應元年の十二月浦はりなく江
 戸へ歸着し目出度其年の冬と送り新たに慶應二年の春と迎へぬ然るに又如路侯には去年高
 見山と始め四名の力士とお抱へにはなりたれども未だ謁見と許されねば更に五名と御屋敷
 へ召出され親しく君侯の謁見と許されし上各自御紋附の羽織其他品々の賜物あり殊に高見
 山は未だ三段目の位置には居れぬ氣象活潑にして行爲凡常の者ならずと特別の例と以て此
 日御傳馬と許可されしのは高見山は夢のどばのり深く恩義と謝し奉つり一同お屋敷と罷出
 でしが爰に高見山は其身と省み前年故郷と立去る折此身幸ひ立身して御傳馬の鞍に跨り天

下の力士と呼ばれば錦と飾りて其時こそ華々敷睡國せんと云遷したる言の葉の志望も今や
屈さのけたり嘸や老母も親戚も我身の上と且暮に案じ過してゐらるゝならん幸ひ御傳馬も
許可たれば久し振にて生れ故郷へ一回往きて來んものと右の次第と詳細のに千賀ノ浦に告
聞え暫時の暇と乞受て江戸と發足道中筋は問屋へ掛りてお傳馬に乘替く最曠やのに若飾
りて上総の國山邊郡大豆谷村へと赴ひさけり

第拾三番

却説高見山大五郎は江戸と發足とるに先だち飛脚に命じて實家なる老母が許へ飯郷の事と
書置ためて通信せしに豫て且暮待詫し俾か歸郷と聞らに老母の歡悦一ト方ならずまた頑
是なき孫(伊十郎)にまで父が歸りて來まするを溫柔くして譽られヨ若此事と母に聽さば嘸
や歡悦とならんと子に惹さるゝ老母の愛情唯嬉しさと懐のしさに泪先立老の癖早々人と諾
方へ馳て親類縁者へ其趣きと細々申し通せしにぞ夫のら夫へと傳説して今日は高見山が歸
郷の日とて那の砂子村の伯父今井佐右衛門と始め親戚故舊は云に及ばず村内の若者等まで
老母と共に東金驛の驛稍盡處まで迎ひに出今のく〜と待程もなく高見山は御傳馬に跨りて
意氣揚々と進み來ると此方の一同夫と見て「オ、關取の待詫しと聲と揃へて會釋するにぞ

高見山は然然と馬より飛下跳つきて老母と拜し此年月待詫と謝し不孝の罪と深く謝し猶健
康にあると祝し其他親戚故舊の人へ一別以來の口誼と述べ厚く其日の出迎ひと謝したるに
此一同も高見山が斯る出世の譽れと祝ひ打連立て大豆谷村の山崎家へぞ送り往さぬ去ば又
高見山は其翌日我家に於て盛んなる祝宴と張り近隣知人は云も更なり親類其他村内の人々
と招待し厚く饗應をたりしるば狹き僻陬の常として忽地四方に評判傳はり田舎相撲の甲乙
まで高見山に面會せんとて大豆谷村の家と訪もの樹なからずと聞ゆたり嗚呼一介の農夫、
乞食が半句の奇言に感じ一朝志念と立たるより未だ數年ならずして漸く宿昔の願望と達し
寔に昔日の磯千鳥にあらす此時にして陳勝に聞しめなば却つて大五郎に一步と譲らん努め
たりと謂つべし閑話休是高見山は今日の歸國と幸ひに是非村内にて一ト相撲と興行せんと
の思慮あれば先世話方其外の手配と定め急ぎ飛脚と江戸へ馳らせ千賀ノ浦方へ照會て力士
數名と招き寄するの約束と結び萬事の都合整ひしるば早々興行場の普請に掛り用意概略届
し頃江戸相撲も前約通り乘込來りいよく明日は初日と出さんと觸太鼓と回せしに此音
と聞て興行と妨害なせし人こそわれ開は何者ぞと釋ぬるに東金驛にて當時は飛禽さへも落
せしと云關八州取締御代官より命せられし三十五ヶ村の大惣代其名と大多和平左衛門と呼

者なり今高見山が相撲の興行と爲すに付て唯一言の届けもなく世に云ツケリの付ざりしと
甚く怒り直ちに一書と認ためて那の惣代の威權と震ひ使丁に爲持て大豆谷村の興行場へ追
遣ければ使丁は直ちに同處へ至り虎の威と候る權柄頼御用と猶の他嚇しに皆一同は何事の
と恐れおのゝき右往左往急に高見山と呼招き惣代よりの書翰と渡せば高見山は不審に堪ず
取手も疾く披き見れば文意無届にての興行は不相成との故障より爰に一場の荷藤と惹起す
其事情は次の様に説分べし

第十四番

翌日は初日と興行場の四方に積し飾り物最負相撲へ進上の敷と盡せし上景氣に勇み立たる
若者等農業とさへに僉休みて高見山が家と始め場所へ多勢は寄集まり各自相撲の評杯口々
になし居る處へ今しも東金驛の大惣代大多和平左衛門より故障と入しと聞て一同色と失な
ひ折角關取の共精も此まゝ土儀と崩しなば遙々故郷へ歸られた花も嵐の亂離骨灰俵残念な
事ではあると一人が云ば五七人慮と傳へ行く田舎道狭い土地とて忽地に此事四方へ傳播て
今度江戸より下りたる關取をもまで打驚るさ如何に落着かすことのと眉と擡めて居たりけ
り然ばまた高見山は熱々と大和多が書狀と讀み使丁の者に云るやう、仰せの趣き勸進元な

る高見山大五郎確のに承知致したり早々興行場も取崩しか差圖通りに爲すべけれど畢竟此
方も一ツの商業妨害られて阿容く〜と唯此まゝには打棄がたし因て是より其事理と大惣代
へ質問せん爲唯今跡より罷り出ん其趣きと疾飯りて平左どのへ申されよと怒氣と含みて言
放ち使丁と歸して忽地に其身は美麗の衣服と纏ひ一刀腰に横たへて供とも運ず唯獨り焦燥
胸に疝癢の 些 尖く釣上て支もる人の言葉も用ひず裝引攪げて一目散東金驛へと急ぎ行く
去程に大多和平左衛門方にては最前使丁の歸り來て角々云々との返辭と聞き、平左衛門は
勃然と怒り汝悪くさ暴言と吐ものな今にも此方へ出來らば大惣代の威權と以て生胆挫い
で呉んものも待構へ居る其の折のら高見山は歩と早めて大多和方へ趣きつ内と乞へば取
次の男は一ト間へ誘なふにぞ此首に暫時扣へ居る時しも紙門と左右に開き傲然として立出
たるは則ち大多和平左衛門にて徐々として上座に着き高見山と後目にはけ懸て那より訓ぬる
やう「此度大豆谷村に於て相撲興行の趣きなるが何故大惣代なる拙者方へ一言の届けもな
く觸太鼓と廻せしぞ仔細あらば語るべし疾々聞んと詰寄ると高見山は聞訖り辭のに答へて
云るやう「仰せの如く大豆谷村にて此度江戸相撲の興行と開きしは我等勸進元の當人なる
が何故ありて其興行の届と此方へ爲とべき譯の一向是迄に例規も聞ず夫等の次第も辨まへ

ねば何卒其意と示致されたしと半分聞かず或丈高「何故とは片腹痛し拙者と何者と心得ぬさ
 る辱けなくも關八州御取締より命せられし三十五ヶ村の大惣代なり假初にも我惣代の村内
 に大小の事故ある時は一々届け出る事問でも知れた作法なり去と何ぞや兎や角と抗抵立る
 無敵の舉動猶も四の五の申さしには誰人として用捨はせぬと聲と放つて宣示せば高見山は莞
 爾と笑み「有爾御作法は聞及ばねと我身は當時の大老職たる酒井雅樂頭の家臣も同じと御
 抱への力士なり上より日本六十餘州自由に興行と免されし江戸相撲の一人なれば何處仕度
 なる國にても我等が興行と差止べき所以は決して有まじと我のら許せし僧の太鼓達て連行
 とお止めあらば我等迎も此まゝに用捨なすべき場合にあらず早々江戸表へ罷り歸り公儀へ
 此旨申し出で貴殿と黒白と等ひ申さん屹度お忘れなざるなと袖打揮ふて高見山が一と問と
 出る折こそあれ那方の障子嵐と押開け關取暫く〜と急ぎ其場へ出たる者あり

第拾五番

呼止られて高見山は思はず後邊と振願れば是はこれ豫て而識たる東金驛にて有名の御客本
 街の勘三逆義と見て勇む氣發の身振り高見山と押寄めて何は兎もあれ此出入と親身に任
 せ吳よと言にぞ速が否とも言兼て然ば委任る其手續と詳しく語り聞さんとして會釋もなご

で大多和の家と兩個は立出の同驛にて有名の割烹店金泉樓へ押登り茲にて始終の談話と爲
 すに勘三もまた疾く領承み日頃出入の大多和家那方に環璫が有ても済ねば双方得心する様
 に信度裁判して見せうと酒さへ碌々飲もやらす匆々平左衛門方へ戻り那の高見山が生立よ
 り江戸へ出ての出世の來歴今度姫路侯のお抱へとなり今の名とさへ賜りしまで悉く〜物
 語りされば那の無届の所行も不埒の様には聞かれと畢竟此方も相撲にまてお世話なさらそ
 どもの事また此上に騒ぎ立なは不慮の事件と惹出さんも圖り難ある渠等の權幕唯此まゝに
 許容あらは双方花の香と散さす互に無事の實と結びて土地も賑ふ相撲のこう行渠等の榮譽
 も高見山其他の力士も安堵すへしと頻りに説れて點頭大多和心意に感せし處やありけん如
 何にも貴公に委任へければよしなに仲裁たのみ入ると弱き言葉と聞くよりも勘三は左もこ
 そと再回金泉樓へ急ぎ往き高見山に斯と告て此處に双方と和談させ漸々笑ひと催す際柄發
 に當驛へ乗込たる江戸相撲の呼出奴何某は狼狽周章金泉樓へ馳來り高見山關に逢してと事
 故ありげなる顔色に女中どもは打駭るき斯と高見山へ報告も待て突然二階へ飛上り高見山
 と見るよりも「關取大變てムりまそ前刻誰やらの來ての話に今度大豆谷村のこう行も此驛
 の大惣代の邪魔するのみ關取と擒獲にして村へ飯さぬとの噂と聞き氣の逸い關取兼は實

否も糺さず勃然と怒り己れ悪くい疫病神奴江戸から下つた力士等の稼業と止るの難のとぬ
 のそ其舌の根と引抜て鯨にして食ふた上高見山と取戻し信度明日は初日にすると今しも大
 多和どやらの家へ押出して行く容子私は前刻に關取と此家てお見のけ申した故急いでお報
 道に参りましたト云と等しく高見山は勘三に會釋して其座の藝妓の取出す脇差腰に投方の
 江戸相撲等の旅舎へと馳行き既に關と跨ぎ出んと騒動なすと押鎖め前の次第と明細に語り
 聞して翌日花々敷こう行せしに乃日珍らしき顔もゑ遠近の老若男女群となして入來り
 加之ならず最負の客より贈られし輪の數は風に靡て景氣能終に興行終るに至りて高見山は
 金七百圓餘の利益と得たりと寔に愉快の一話にこそ

第拾六番

著松移し植る東江城、三百年來晚翠清、と吟誦されたる徳川の政令茲に衰へて天下は麻の如
 くに亂れ兇漢惡徒は晝夜と分たず漫りに市街と横行して豪商富家に害と及ばす濁世澆季の
 時にあれば人心一日も穩やのならざる慶應二年の春二月高見山大五郎は故郷上總の興行も
 滞ほりなく打上て他の江戸相撲と共に歸府せし後此年の春相撲も萬事首尾克く濟せしのは
 親方公なる千賀ノ浦方へ弟子一同は寄附て居る然るに千賀ノ浦は諸事の都合と關り從來の

深川御藏前大口横町の住宅より兩國米澤町の新道へ移轉り愈此處に住居たり憚て世の中
 は月々に騒々敷成もさて諸國の無頼浪士は多く江戸に入込來り貨財と掠め喧嘩と張り殺傷
 街衢に聲と絶ねば良辰安き心もなしのゝる不穩の有様なれば千賀の浦も弟子等と謀し合せ
 嚴しく要慎なし居たるに一日の懸燈壇なりとの兩個の浪士は米澤町なる千賀ノ浦の宅に來
 り折しも閉せし門の外より左も横柄なる聲と上げ開よくと怒鳴と聞き竊のには是と窺へば
 黒紋付の古小袖に無反の長刀落し差兄たり難く弟たり難き共に兇惡の面類音訪來りし此者
 等は此頃流行押借ならんと早くも猜せば千賀ノ浦は態と家裡より聲と被け恐被て渠奴等と
 退却ぞけんども門外なるは何者を此家の主人と知らざる歎辱じけなくも越前福井の城主松
 平越前守のお抱へ相撲千賀ノ浦が住宅なり何用ありて亂暴に我門口と打敲くぞ仔細と申
 セト罵示せと浪士原は少しも恐れず冷笑ひつゝ答ふる様「たとへ越前侯の抱へなる千賀ノ
 浦が宅なりとも何の用捨あるべきぞ我等は天下の浪士なり其千賀ノ浦に面會して申し談ず
 る仔細あれば態々御足勞遊ばしたのだ難有いと九拜して早く門と開らば宜若も四ノ五ノ躊
 躇む目に物見せぬぞ覺悟せよト大喝一聲一人が腰の刀と閃々と引抜き板塀四五太刀研付る
 其勢に驚き恐れ千賀ノ浦は這々の体と爲し周章て二階へ駈登り八九人の弟子共へ急迫く

是と報知しにぞ逸りきつたる若者輩此事と聞と等しく汝悪くい素浪人やはの息の殺止て呉
 んど各自手にく得物と携へ又は二階の窓より登りて家根の瓦と引きめくり力士と目越て
 投げのけんとかさく用意と爲したりけり然るにまた浪士原は門外に此物音と聞付しの刀
 と鞘に投方の何處ともなく立去たり有爾程に千賀ノ浦は賊去て門と閉づの古説と守らず彼
 の浪士原が門外と立去たるに心傲り猶且血氣の力士等が逸り立たる擬勢に乗じ兪の者に指
 揮して言やう今の浪士が難言過言諷怪至極の振舞なり加之す我門戸と亂暴に斫付しは傍若
 無人の悪くさ奴原各自用意せしこそ幸ひ遠くは往まい跡追蒐て虎狼に比しき惡徒と忤し世
 の禍根と除くべし卒として其身も精悍しく仕度なし勢ひ込で立出んとなしたる時最前より二
 階の隅に腕又ぬきて默然と動きもやらでつ居たる高見山大五郎は此有様と見るよりも慌
 忙く走り出師匠の袖と引停め「師匠は何處へ往るゝぞ心得がたき此騒動如何にも唯今の浪
 士が暴動言語に絶たる亂暴なれどもいはば渠等は世の長物關係ぬが此方の利徳幸ひに門開
 らぬゆゑ歸り往しは勿怪の僥倖唯此まゝに打棄置とて何の此方に障礙のあらん惣じひ彼等
 と還往は却つて禍ひと買もおなじく良や浪士と斃したりとも此方に傷と受もしなば世に云
 毛と吹て疵と求むるの譬に近く誠に馬鹿くしき限りなりト半分聞ぬ千賀ノ浦は兪術と打

笑ひ「汝は平素度胸よき廣言と吐散せと今日と成ての其卑怯は言行相違なすに非ずや汝一
 人浪士が怖くば同道せざるも妨げなし卒兪の者來られよと袖振棄て馳出し浪士の跡と逡往
 しに折しり藁の兩個の者と藥研堀にて礎と邂逅ひ睨み合間もあらばこそ千賀ノ浦が指揮の
 下若者等は得物と打振り浪士と真中に押取圍み働とも言で撃てのゝると浪士等は見て勃然
 と怒り「汝等は何等の狼籍ぞ意趣の遺恨の物盗か天下の浪士と知らざるや覺悟とせよトの
 言葉の下腰に帶たる一刀と閃々と抜て身構へなし寄ば斬んと睨まへたり衆と頼みの若者共
 何と胡笏な素浪人あだ口ぬのさす往生せよト滅多無法に捧打振り始めは屈せぬ勢力なりし
 か流石の太刀風に斫立られ千賀ノ浦と始めとして多勢の弟子も逡巡して兪通仕度の氣味あ
 ると得たりと着入る兩個の浪士互ひに一刀打ふりく前後左右に追回と折しもあれ此處へ
 高見山大五郎は最前師匠と諫めしが用ひられぬと遺憾におもひ獨り留守居はなし居たれ
 去とて師匠の身の上の氣遣はしさに堪やらねば思はず師匠の家と立出で米澤町の四ツ辻ま
 で辿り出たる鼻頭に晃めく刀の電光偕はと心愕然たり

第拾七番

暗しも日暮て開もなければ往來の老若男女はソレ喧嘩よト立腹と動搖めと渡りて混雑と中



にも胆太り彌次馬連は人の軒端に遠くイすみ此争闘と見物すれを緯の仔細と詳らに知ねば
 十人寄と十種の評言「モン和主大變な喧嘩てムリ升か何の遺恨でもムリ升のな」されは
 サ私も詳しくは知りませんが一方は相撲年寄の千賀ノ浦親方の弟子等て敵手は九州浪人だ
 さうですの何でも容子と見るに那の浪人の一人の故郷に居る時高見山大五郎の父親と殺し
 たどやられて夫ら高見山は小兒ながらも口惜くおもひ親の敵が討たいト十二の時に故郷に
 出て先年故人になられた阿武松庄吉親方の處へ憑據相撲に成た其後も諸所の興行場て敵の
 奴と尋ねたが遂にめぐり逢なつたと今日はのらすも其敵に邂逅した處ら名乗合の敵討
 情願首尾克く敵の奴と負させて遣たいものです「は、ア左様てムリまその爾して其高見山
 と云關取は何國の人てムい升チ「その高見山のエその高見山は肥後の熊本の出産て加藤虎
 右衛門と云鍛冶職の息子だと云事ですト半分云せず又一人が「失禮ながら和主には何にも
 御存じないと見ゆ升アノ阿武松の家の高見山と云たら當時賣出の流行相撲裏垣路のお抱
 へに成て何でもすばらしい今の勢力今夜の喧嘩の譯は聞ぬが其高見山なら生産は上總の東
 金在だト鎧のに聞て居り升たと横合からの一言に獲の一人は問のわるさうに鼠狐く其
 と立去れと猶かにかくとの評議區々最姦ましくと聞えける有爾また千賀ノ浦は憤怒の餘り

弟子と引卒て浪士の跡と追來りしか案に相違の手術に恐れ放々我家へ引返し家族の者等と
 急立て遮のに深川へ(舊宅)立退のせ其後難と避しめたり夫とも知らぬ高見山は眼頭に見々
 く刀の光りに逃散る火位の提さへし六尺棒と借取て今しも此方へ追來た浪士兩人と渡りあ
 ひ奮激突戦虚々實々霎時あしらひ居たりしかは先に其場と遁出せし相弟子の四五人も是に
 氣と得て又盛のへし响て喊て撃て獲れは今は浪士も打驚るさ是はト怯心氣合と圖り高見山
 は力の限り双手に棒と打振く勢ひ込て薙立る必死の働らさ獅子奮迅わたるへくも有さり
 しの一人の浪士は過ッて受損したる棒の刃に横面類したるに陥はせられ何のは以て堪る
 べき叫と其場に反仰て暫時は呼吸も絶果たり是と見より同伴の一人は怖氣と自ら心に迎
 ひ友と援くる逸もなく命のらくと逃去しと此方は強ても追さりしとそ憚而高見山は聲介し
 たる一人の浪士と相弟子と共に扶け起し傷所と更ため呼活すに忽地心づきたるが其身の不
 覺と深く恥ぢて厚く粗暴の罪と謝人立多き其中と潜りて竊のに逃去しは最も可笑風情なり
 しと「現に光陰は白駒の隙と過るが如く紅姫の檢と投するに似て寔や放てる矢よりも速く
 いつしの慶應の三年も名残なく暮果て同じく四年と改たまりぬ是より先高見山は勝相撲の
 番數と重ね幕の内に昇りしのは當時破竹の猛勢にて敵する者もなかりし程なり憚而其年の

四月改元ありて年號と明治と稱び爾來一世一元の永式となす去年の冬、徳川公城を許し一朝政權と奉還せしより從來の權職上大老老中、若年寄、諸奉行は云も更なり下仕番の役人に至るまで不殘其職と放たれて海内維新の大變革萬機御親裁となりたるにぞ播州姫路の城主酒井雅樂頭どのにも大老職の印綬と解られ藩地姫路へ歸城せられぬ此時に當りてお抱へ相撲高見山と始め境川、手柄山、相生、兜山、の五名は更にお抱へと解るゝ旨の口達ありて藩の混雜一方ならず然れば五名の力士等も今更遺憾の限りにわれど奈那ども詮方なければ一ト先御請はなせしものども積年恩顧と蒙りたる情義に依て離れがたく何れも協議の其中に境川は不得止るの事故ありて尾州侯のお招きとなりお召抱へととなりたる旨四名の者へ披露あるより急に高見山は發憤者となり手柄山、相生、兜山、の三名と呼集へて談ずるやう、時世時節とは云ながら上將軍家と始めとして諸大名より旗本まで廻り變つた今度の改革我等四人も其如くお抱へは解れたれど忠臣は二君に仕へすとやらの古語もあり相撲風情の我等にも積る御恩は武士もおなじく又御家來も同様なり然れば今更お抱へと解れしとて他の雇人を見る如く忽地外の抱へとならば其薄情と人も尤の又良心にも恥るに非ずや就ては今後假令一粒の米一絹の錢と頂戴せずとも積年の御恩報じに各自斷乎と決心して必らず外の

お招きと謝し永く紀念となさん爲番附の記名へは矢張是までの通り姫路の二字と然し置は他の聞えの宜のみならず堅き志操も顯はるべしと語ると聞て三名も現に道理と領承ひて其場に誓約と取結び直ちに右の趣きと書面に認ため酒井侯の御名代として當地大手前の藩邸に在勤する公用人中新井何某の許へ差出せしに願之趣き殊勝なりとて殊の外感賞され追てお國元へ進達の上沙汰とべしといと懇切に言渡されぬ

第拾八番

借も四名の力士等は堅く誓約と立たる趣意の書面と姫路侯へ奉呈り許否の御沙汰と待てり爰に又高見山大五郎は當時旭の勢ひ有て最負の客の數多くこう行毎の贈物續頃祝儀山と爲し身に剩る桑譽と得たれば新師匠なる千賀ノ浦にも事由と告げ其身は兩國若松町(同朋町とも云なる)舊細見百助(舊旗本)の邸内に一月と持ち故郷上總の國大豆谷村より老母と小兒と迎ひ取り(妻何某は之より先病に罹りて没す)侍養の孝と盡せしは寔に初志に違はざる義胆左こそと思はれたり當時柳橋の藝妓にお兼と呼ぶ流行妓あり性質任侠と抱きて往々愉快の舉動有より豪客常にお兼と聘して酒間の一さやうとなすお兼は能飲み能談す故に人呼でから兼と緯名せり乃日柳橋の藝妓歟とて有名の力士と馴おやまは相生にお〇〇は磐石

に其餘二三名各自想ふ力士に寄る獨りお兼は高見山大五郎と誓ふて堅く伉儷の約と結び或人媒始して婚儀とも訂びたる交情なれば平常高見山は柳橋裏川岸なるお兼の家へ起臥するの日多ありしとぞ然るに此年(明治元年十二月)の中旬頃高見山は横濱の最後客に招き寄られ暫時彼地に遊びとりて其十二月三十日漸やく東京へ歸り來り陽春の仕度の何や彼や心せわしき屈托に我家の方と殘らず濟せ黄昏頃より柳橋のお兼の宅へ音訊ひ往くにお兼は倉忙さ其中に高見山と一ト間に招き「關取おまへが留守の間に異な事と聞こみましたか是が眞實信ならば豫て四名の約束も今更詮ない小田原話しおまへも嘸のしお聞たらうと變つた調子の言葉の綾に高見山は不審晴す「異な事とは如何云仔細と問ばお兼は答へて云やう「如何云譯の知らないがおまへが横濱へ往た留守日頃兄弟同様に往來ひする那の相生關と土州樓(山内容堂公)のらお招きになり御酒頂戴の其席にてお抱への御妙法があつたよもやとおもふた相生關は忽地其首で御請申し拜領品の其上に名さへ綾瀬川山左衛門と賜はりしよし確のに聞て置ましたト聞ども流石高見山は是と實説と妄りに信せず心中深く疑團と生じ勿々人と四方へ遣はし相生松五郎が舉動と密かに探索するに那方は當時日本に肩と並ぶる者もなき豪華の君の愛顧と得て心中昇天の喜悅あれば誰にも傳ふる氣色なく却つて是を榮譽と思ひ廣く吹聴なす程なれば見聞の人は立歸りて詳に高見山へ報知なすより情は愈々相生は曩の誓と倫たるものと怒氣滿面に照れたりさるるらに性急活潑なる高見山初めお兼が話しにては半信半疑にありたるが即時四方の報知に因いよくお兼の話しに違はず公然相生松五郎は土州のお抱へと成たる事と確のに聞得て益々怒り疊に四名は同盟して假令御扶持は受けずとも數年受たる御恩報じこの後決して他家へは召されず姫路の二字と番附に記して後の紀念になさんと誠と込たる願書まで頭首と揃へて差出せし其墨のまだ乾ぬ間に二君に仕へる不忠の舉動如何世間が變ればとて武士も同じき天下の力士帯刀御免の身と以て一朝土州の勢利に感ひ姫路の舊恩と忘るゝのみ我々三名の同盟者と欺むきたることを論怪なれ卒々我にも有意志的と直ちに手柄山と兜山とへ書翰と送り急に相談の事あれば早速參會下されいと使と以て促がせしむ時しも大晦日に際り世間は節期の大難沓に兩力士も急に來合せ殊に側甲乙まで今日は師走の大つどもり必らず今日に限る事は來春迄々談判なすとも決して不都合あるまじと宥める言葉に高見山も道理なりと胸と摩り一時自ら怒氣と抑へ其夜と明せばあら玉の年たちのへる四方の春暎々日の出の朝より市中は去年と事變り屠蘇の穢嫌の門禮者往來賑はふ繁昌は現にや東都の花なるべし茲にまた綾瀬川山

と事變り屠蘇の穢嫌の門禮者往來賑はふ繁昌は現にや東都の花なるべし茲にまた綾瀬川山

左衛門は常に交情密き高見山が十二月の中旬より横濱へ往たりと聞居たりしが除夕節に歸宅せしとの噂あれば年始と兼て土州侯へ抱へになりし事特とも篤と咄して置んものと元日早々柳橋なるお兼の宅へ音訊を居常に變る待遇にて碌々會釋もなさる容子殊に高見山は留守なりとて面會せざる景狀に借はと早くも肚裏に覺り察する處高見山は我身が同盟の意に背き土州のお抱へと成たると定めて怒りて居る故ならん好遮莫れ此方の勝手那何程の事のあらんと下婢に倉皇々々挨拶してお兼の宅より歸りしが夫より双方何となく隔意と生じたり恚而その年（明治二年）の正月三日九段坂の招魂社に大祭あり當日相撲と興行と縦覽勝手にあるものより諸人の群集山の如く淵とも埋む難香なり此日高見山は他の相撲と諸俗に早く塲所へ詰籠居たるに綾瀬川は少し後れて出來り列座る相撲へ會釋はなせと獨り高見山へは言葉も交へず傲然として座に着たるが世間話しの其中に故と高見山へ聞がしに今度土州へ抱へとなりし其廣言と吐たるより猶又方に隙と生ずる其事情は次回と讀みて詳細のを知るを得べし

第拾九番

登下綾瀬川山左衛門は他言にして語る様今也 王政復古の世となり百事維新の制度に據り

上徳川の將軍職とら疾く朝廷へ奉還し國は藩縣と改たまり從來の大名衆すら如何なる事の分らぬ世界にヤレ舊恩た誓約だと小入聞敷云やつは夫こそ舊弊と云酒問どのの組合にて時勢と知らぬ者どもなれ我身は聞たる事もあれば其舊弊や頑固と察て現今の時節に順ひ往き假令世間で誹評なすとも理に背のねば祟りもなく法と守れば此身も安全寧ろ馬鹿正直といはるとより開化の人と呼ん覺悟左はあらずやと傍はらに人なき如き語勢と張り叩と笑ふと聞に付け高見山は烈火の如く怒り心頭に發せしるをも御大切なる上の祭日殊に多勢の前もあれば所詮此首にて争ふとも障碍多くて甲斐なうらんと獨り胸中に分別し唯一言とも發せずして無事に該塲所と終りしが右恚次第にあるものより高見山は憤念ますく烈しく片時も忘るゝ隙なき折ら毎年正月の五日には相撲組合一同の初密合とて年寄と始め關取まで兩國回向院前の相撲會所に集會し相撲規則の相談あるが恒例なれば此日も皆々例に依て朝より會所へ寄集まり夫々規則と評議し居たり此時綾瀬川も一座に列し高見山と相對ふて有たるものより互に睨み合ては居れど更に詞と交ゆる事なく自づと殺氣と含みてとり被是する中一同の評議を次第に決し訖れば目目度一酌と催ふさんと其頃有名の相撲年寄伊勢ノ海、玉垣と始め各自二階の座敷と退ぞき別席に到りたれども高見山は依然として其席と

動さもやらねば他の相撲等は是と翻め強て酒席へ誘なばんと左右よりして促がせども高見
 山は少しも聽ず其人々に對つて云やう。今日は一年一度の集會殊に相撲の規則ばりの人
 々の正邪まで評議にのけて賞罰する最ども大切の日に有ながら仲間内に不都合の者ある
 とさへ不問に措き何等の評議あらざりしは心得難き次第なり夫故斯云高見山は少しも目出
 度存じませねば祝ひの酒は飲不ず各自方は御隨意に何れへなりとか出われ我身は其首なる
 綾瀬川に問たき事の數々あれば暫時お聞下され度と膝と進めて屹然せり「其首なる關取綾
 瀬川高見山が御意得たし貴殿は鬻に我々四人と共に連判誓約して姫路侯へ奉まつりし願書
 の趣意と忘却せしる誰あらふ天下の力士と呼喚さるゝ綾瀬川山左衛門が奮恩情誼も願みず
 酒井侯の御沙汰も俟で盟と破り利に惑ひ他へお抱へに成しとは日頃似合ぬ貴殿の舉動夫
 のみならず招魂社にて世間話しに比へし大言能こそ大五郎等と辱しめられ卒今日こそは違
 約なしたる仔細と聞ん疾語られよ返答如何と詰寄たる高見山が憤怒の景状すましくこそ
 見えてけれし土俵の上の争格には恐るゝ人なき綾瀬川も徳義の上の詰問に詰と詰りし當座
 の返答如何にせばやとおもひ兼ね差俯いて言葉もなければ高見山は彌々焦燥再回山左衛門
 と詰責する様凡そ力士といへる者は畜に臂力にのみ依ものならず勇義兩ながら具備して

こそ眞の力士と稱すべけれ然ると何ぞや數年愛顧と蒙りたる姫路侯の恩義と忘れ剩さへ同
 盟の我々へ恥辱と予へて恬然と人もなげなる舉動あると誰の力士と稱べきぞ其事情と悟ら
 ずして世間の人の口々には我等三名の 賜まで腐りし様に誹毀せられたる其面晴には今茲
 で汝の首と貰ひ受け違約なしたる言譯に姫路侯の屋敷へ捧げ我身も其首で腹掻割き汝と共
 に冥土へ往ん心徐々に覺悟とせよ夫ども外に返答あるの奈何く〜と嚴しい議論に綾瀬川は
 益々詰り進退維に谷りしと見るに見兼て年寄共は兩人と左右に分け隔て那方と宥め此方と
 諭し漸々高見山と別座に伴ひ種々中裁の談話となせき公私に關りし事情なれば輕々兼背も
 入す雲時黙止て居たりし中流石綾瀬川も他の年寄や相撲の前へ面目なしとやおもひけん別
 座へ強て誘引れし夕酒盃と搦得す席と辭し他に先だち歸宅せり高見山は夫と推し彼此所と
 辭し去とも宅へ歸るの外はあるまじ好是よりして山左衛門の宅へ押駆け做かけた出入と果
 さんもの心と決めて皆の者へ唯何氣なき挨拶なし會所の關と跨ぎ出相撲茶屋の川平へ立
 寄つ身仕度なして居たる處へ田子の浦(柳川侯のお抱へ)と磐石(藤堂侯のお抱へ)の兩人は
 邊忙々高見山が跡と踵來り一同の惣名代なりとの意にて頻りに仲裁と乞望めを烈火の勢ひ
 却々肯す終に兩個に事情と述べ折角の仲裁と聞ぬも餘りに強情なれど死と極めたる今度の

出入一世の榮譽に關はる事ゆる暫時我意に任せ吳よ然とて貴殿等への規模なければ腰に挿
ひ此一刀は取も直さず我殘魄是とお預けやすべし是と會所へ持歸り皆の衆への復言よしな
にお傳へ下されと常に其身の秘藏せし一刀兩個に手渡さし開がまゝ川平と立出しが何か
もひけん高見山は其身の家へは入らずして米澤町なる師匠千賀浦が宅へ到りぬ

第二拾番

借も高見山大五郎は師匠の家と音訊ひしが未だ千賀ノ浦には初寄集の場處より歸らず家裡
には細君と兄弟共のみ留守してあると幸ひと大五郎は何氣なく平素の通り茶の間へ通り會
釋とよりて其後に佛間へ入て燈明點じ故三代目阿武松の靈牌に香と手向け念佛讀誦の其中
に今度の事情と心に告げ三拜なして其座と退ぞき更に千賀ノ浦の細君に打對ひ。借今日高
見山が参りしは別儀にあらす今度此身に思ひ立たる事ありて至急遠國へ發足の期に迫りお
名殘惜くも是より直當地と立去心体なり就て千賀ノ浦親方には永年お世話と蒙りしが今に
万一の報謝もなす此儘お分袂になるとおもへば我身に恥てお暇乞と迷る言葉もあらざる
仕合せ何卒御歸宅ありたらばよしなに御傳言下されたく遽然の用意に心も迫ば去來御殿と
申べし随分御自愛なされよト重き師恩と先謝して是が此世の別れかとおもへばせき来る泪

と呑み込み挨拶倉皇千賀ノ浦の家と漸々立出て柳橋裏川岸なるお兼の家へ赴きつ今度の始
末の決斷と變りなく物語り死ぬるは男の常なれば我身綾瀬川ノ首と得て姫路候へ捧げし後
割腹せしと聞たらば夫と此世の名殘にせよ事は今夜に迫りたれに盡時なりとも女々しくし
て不吉の舉動なすなれト殿といはれてお兼は喉嚨破ての氣質と知ては居れと斯までの事
あらうとはおもひがけねば胸潰れ言葉もなくて茫然と顔打鉢め居たりし折ら高見山は弟
子と招き若松町(横山同朋町)なる我住家へ事理さへ告す何氣なく秘藏の一刀と取に遣し積
かにおくとお兼と諭し淨肴と命じて快く三杯と傾け居たるに難に自宅へ遣はし、弟子は
間もなく歸り來りて勝附られし一刀と持飯りしと取より早く去ばトばより腰に挿み用意な
したる身輕の行装裝引のらびて勇ましく出んとせると惹扯るお兼が別離の愛惜に有聲氣
の大五郎も胸塞がりて稍雲時おもはず其首に猶豫しが忽地自らの氣と取直し噫我ながら不
覺なりしと羈絆と斷て袂と分ち歎くお兼と願りみす心投たる敵手の住家兩國加賀屋敷町な
る綾瀬川の家へ到り竊に家理の容子と見るに綾瀬川の聲はせねと女房おやまと治子共の談
話は外に聞ゆるものすら先戸口より案内するとおやまは聽て急ぎ立出高見山と見るよりも
最懇懇に會釋なしとて是へと一ト間へ請じ茶煙草盆の饗應に加才内儀の取回しは有聲神妓



と猜されたり去ばまた高見山は今日の始末と憂はとも色に出さず徐々に年始の禮なを述べて重ねておやまにいへる様「今宵此方の關取に内々の用談ありて態々罷り越たるが關取には留守なるの但しは奥に如何ぞと問れておやまは不審顔まだ何事も聞得ぬにや氣の毒さうに答ふる様「今日關取には初寄合に出たまへで未だ歸りは御座りませぬぞお約束とあるからは最早其中歸りませうのら暫時お待下されのしと程よく待遇居たりけり

第二拾一番

今宵結局の談判して詮に寄なば刺ちがへ死でも世間へ潔白の名と表はさんと決心し待せもく綾瀬川は歸宅の容子あらざるより偕は我身が會所にて詰負したる詰氣と覺りて家へも歸らず何處への身と潜りしと覺ゆたり左ある上は留守の家へ何時迄待て居るも甲斐なし好運莫れ今宵の中に詰處と探りて環會んと尋思と決めて内儀にひらひ「是まで待に歸宅のなさは定めて餘處の用事に關りて急に外さぬ事と思へば亦出直して面會すべし歸宅あらば勿々に我家へ報知て下されト輕言葉と殘し置き最後しげに會料して門と靜りに立出しが心は頻りに慌操は日頃綾瀬川が往來ふ家と残りなく尋ね廻りて夜の更るとも知らざりけり先之き同朋町の自宅にては高見山の老母と伊十郎とが留守と護りて居たりし處へ弟子

の奴は使に來り仔細あり氣な刀の入用急にと言も心得難く是には定めて容子があらうト社裏に覺れと強氣の母親唯一言も傳へずして弟子に一刀手渡し柳橋へと取せし後其身は佛前に念佛誦讀なし居たり浩る處へ門口より音訊來りし兩個の力士且見れば義利に川平にて高見山に分袂たる盤石と田子ノ浦なり老母は豫て見識の人達殊に揃ふて來れしは容子と尋ぬる因に屈竟能こそお尋ね下されしと兩個と一ト間へ詰すれば兩個も老母へ會わなし繼て詞と揃へていふやう偕御老母に折入てお委囑の一儀あり今度此方の關取と綾瀬川關との間に斯々云々の葛藤が起り既に先刻會所にて議論ありたる其中へ年寄中の惣代として斯云兩個が仲裁に入り種々關取と和めた甲斐に一時は勘辨の様子なりしが尋常ならぬ關取の氣性却々此まへには濟とまじ畢竟するに綾瀬關が心得違ひの筋もあれば立腹さるゝは道理なれど夫と只願穩便に鎮めたいが我等の希望夫に就ては豫々より親孝行と評判の高い此方の關取唯一ト言は老母より勘辨してどの言葉があらば無事に治まる此出入此儀と違てお委囑の爲年寄衆や關取の惣代として此兩個が態々此家へ出向さましたト退引ならぬ言葉の欄老母は胸に堰どめて雲時尋思に暮たりしが頓て兩個に對へて云やう一同の惣惣代とて態々の來臨にあれば委細は悴か版宅の後篤と説諭は致しますすれと兼て氣疾の那が性質前利も前

刻とて家に秘藏の一刀と使の者に取に遣し何歟覺悟の爲体夫とおもへば此家へ再回皈つて
 來やうのと今しも案じて居升どころと聞て兩儀は打驚るさ然らば前刻開取には刀と取に遣
 されしか借は愈々猶豫し難しさらば今より取て返し重ねて會に相談の上高見山關に面會し
 及ばぬまでも最一度和談の術と盡しやさん若も入違ふて歸宅あらば其邊篤と伊依頼すすと
 會釋なしつゝ、兩人は急ぎて此首と歸り往く不題に高見山大五郎は其夜諸方と徘徊して飽ま
 で綾瀬川に環會んと心當りと尋ぬれども更に姿も見ぬさるのみか廻々更關世間は寢て最
 探索の術もあらねば止事と得ず我家へ悵然として飯りしは丑三ツ過る頃なりとぞ老母は未
 と見るよりも借は先刻參られし田子ノ浦と磐石關が怒りと和めて飯し呉し何は鬼もあれ
 變りもなく無事に歸つて來られしは此上もなき目出度こと、案じ暮せし病さへ一時に癒へ
 る心地はすれを綾瀬川との出入の事は如何結局たるならんと思ひながらに臥床に入り雲時
 睡るひ其中に早告渡る八聲の鶏に驚るのされて起出つ且見れば大五郎は臥床にからず小庭
 の雨戸の開てゐるは最訝のしと慌忙敷内外と急に見廻せば是はく、什麼大五郎は井戸に寄
 て水と浴び身体と清め合掌して天地と拜し居る様子に惣祈念と妨害してはト老母は我子の
 心根と察しやりつゝ、氣と惱まし獨り朝飯の用意にのゝり座敷の掃除掃するるとき大五郎も度
 處に戻り老母に夫と告ねども今日は此身と義の爲に棄ねばならぬ男子の意地是まで養育下
 されし海より深き恩さへ報ひもやらぬ不孝の罪許させ玉へといは、ぬにいはいねと老母も
 愛惜の霧に惹るゝ煩惱心今朝の容子と察するに昨夜は事の成ずして再回出向くと覺ぬたり
 引停たさは山々なれど私情ならぬ今度の出入強て止れば我子まで身性ど人に呼れもすべし
 如何せばやと親と子が案じる胸は愛情孝義沸る泪に朝飯のふき出すとも知らざり亮かゝる
 處へ門口より高見山關は在宅にのと頭首と揃へて入來りしは當時相撲組台に威權ある年寄
 玉垂額之助、伊勢海五太夫と始め其餘の年寄は云に及ばず大關、關脇、小結以下關取等まで
 連なりて居處狭まで居並びつ時誼訖りて後今度の出入と百方仲裁の説諭と入られ今更高見
 山も困じ果しが第一には日頃の交誼第二には多勢の心配兩様棄るは是又義ならず不如仲裁
 に委せんにはト早く自ら肚裡と決め其趣ひさと同へ答ぬしにぞ皆の者は其意と繼て勿々
 綾瀬川へ對談し高見山が所望に任せて前約違犯の謝罪書と出させ數日結んで解さりし力士
 と力士が心の縫も漸々此日に和解たるは最も目出度事にと有けるのゝりしはとに高見山
 は前の顛末と詳細に書認め綾瀬川が謝罪書とも取添て再回廻路侯の公用人中新井何某許持
 參なし猶其事情逐一に言上せしにぞ中新井氏にも深く高見山が義氣豪膽と感賞し早々早飛

刻とて家に秘藏の一刀と使の者に取に遣し何歟覺悟の爲体夫とおもへば此家へ再回皈つて
 來やうのと今しも案じて居升どころと聞て兩儀は打驚るさ然らば前刻開取には刀と取に遣
 されしか借は愈々猶豫し難しさらば今より取て返し重ねて會に相談の上高見山關に面會し
 及ばぬまでも最一度和談の術と盡しやさん若も入違ふて歸宅あらば其邊篤と伊依頼すすと
 會釋なしつゝ、兩人は急ぎて此首と歸り往く不題に高見山大五郎は其夜諸方と徘徊して飽ま
 で綾瀬川に環會んと心當りと尋ぬれども更に姿も見ぬさるのみか廻々更關世間は寢て最
 探索の術もあらねば止事と得ず我家へ悵然として飯りしは丑三ツ過る頃なりとぞ老母は未
 と見るよりも借は先刻參られし田子ノ浦と磐石關が怒りと和めて飯し呉し何は鬼もあれ
 變りもなく無事に歸つて來られしは此上もなき目出度こと、案じ暮せし病さへ一時に癒へ
 る心地はすれを綾瀬川との出入の事は如何結局たるならんと思ひながらに臥床に入り雲時
 睡るひ其中に早告渡る八聲の鶏に驚るのされて起出つ且見れば大五郎は臥床にからず小庭
 の雨戸の開てゐるは最訝のしと慌忙敷内外と急に見廻せば是はく、什麼大五郎は井戸に寄
 て水と浴び身体と清め合掌して天地と拜し居る様子に惣祈念と妨害してはト老母は我子の
 心根と察しやりつゝ、氣と惱まし獨り朝飯の用意にのゝり座敷の掃除掃するるとき大五郎も度
 處に戻り老母に夫と告ねども今日は此身と義の爲に棄ねばならぬ男子の意地是まで養育下
 されし海より深き恩さへ報ひもやらぬ不孝の罪許させ玉へといは、ぬにいはいねと老母も
 愛惜の霧に惹るゝ煩惱心今朝の容子と察するに昨夜は事の成ずして再回出向くと覺ぬたり
 引停たさは山々なれど私情ならぬ今度の出入強て止れば我子まで身性ど人に呼れもすべし
 如何せばやと親と子が案じる胸は愛情孝義沸る泪に朝飯のふき出すとも知らざり亮かゝる
 處へ門口より高見山關は在宅にのと頭首と揃へて入來りしは當時相撲組台に威權ある年寄
 玉垂額之助、伊勢海五太夫と始め其餘の年寄は云に及ばず大關、關脇、小結以下關取等まで
 連なりて居處狭まで居並びつ時誼訖りて後今度の出入と百方仲裁の説諭と入られ今更高見
 山も困じ果しが第一には日頃の交誼第二には多勢の心配兩様棄るは是又義ならず不如仲裁
 に委せんにはト早く自ら肚裡と決め其趣ひさと同へ答ぬしにぞ皆の者は其意と繼て勿々
 綾瀬川へ對談し高見山が所望に任せて前約違犯の謝罪書と出させ數日結んで解さりし力士
 と力士が心の縫も漸々此日に和解たるは最も目出度事にと有けるのゝりしはとに高見山
 は前の顛末と詳細に書認め綾瀬川が謝罪書とも取添て再回廻路侯の公用人中新井何某許持
 參なし猶其事情逐一に言上せしにぞ中新井氏にも深く高見山が義氣豪膽と感賞し早々早飛

膝と以て姫路に在る君侯へ委細と言上に及ばれし處君侯にも殊の外稱賞あり更にお抱への旨と達せられ猶高砂浦五郎と改名すべきの下命あり夫より御扶持として年々米代金七十三兩ツ、下賜はりしは實に一世の美談と云べし

附て白の其節兜山と手柄山には何の御沙汰もあらざりしと後に高見山より上申して遂に再回兩人とも同族のお抱へとなり此件全たく結局せり

第二拾二番

凡そ人の世に處する難に當り艱に堪干辛屈せず萬苦撓まず能其志堅と達する者天地間夫幾人のある況んや社會一小部分中の小部分に位し藝藝故辭の多く存せる相撲仲間にててや現時より當時の景状と回顧れば習慣深く浸潤して人々野蠻の馳行多く實に感然なる次第なり其最も苛酷なりしは相撲年寄或ひは又名有相撲の弟子と遇するの浮薄なる番に衣食と供するのみにて一年兩度の晴相撲と始め諸國へ出稼の花相撲まで數回興行の給金は悉皆師匠(親方と云)の手に収め一文半錢だも弟子に與へず漸くにして幕下十兩取の關取に出世の末僅のみに小遣と給するのみ其威權虎狼に等しく無情といふも後輩のりき素より此相撲組合に入んとする者大體尋常一様の人にあらず成ひは放蕩に身と持崩し又は喧嘩に故郷と遠れ少しく精力と腕にすれば直ちに走つて江戸へ出で相撲の火伍に入もの多きも十中八九は辛賤に堪ず再回此群より脱走して無賴の黨類に伍するものあり其頃相撲の中に偷兒ありしも亦故わり賊や錦繡の彩袍と土俵の上に輝し名と番附の上に揚るは容易ならざる難業なり身に高砂浦五郎は其身是迄艱難と嘗來りたる事歴に徴し世間幾多の壯士輩が相撲の群に入と見て心中常に親方等の無情と慨さ如何もなして苛酷なる此習慣と除らばやと頭と病して居たりけり去程に光陰は梭と投するよりも速くして明治も夢の間に四年とすぎ去り今茲は五年の春とはなりぬ一日高砂は我家にありて獨り猜々尋思するやう我往つ年故郷にある頃隨らず乞丐が一言に觸まされ終に祖先の遺業と措て一走此地に登りしより茲に十有三年來幸ひにして艱苦と忍び漸やく初志は達したれども到底相撲の業とて老後の策は立難れば近々其機と探り得て断然廢業なして後身の進退と決せんものと獨り心と定めたれども此年月の高恩の萬分一も師匠(千賀ノ浦)に報せず此まゝ我身の思ひ通り廢業するは快ならず何とかなと報恩の思案に暮て居たる中不圖其胸に浮みし一策是を寔に良計と竊りに喜悅の眉は開けど時期其機會にあらざればと未だ他言と事なく其年春場所の興行訖りて後續瀬川。小柳等と濱州地方へ赴むさの意而一日の事なりしが前夜より降しきりたる雨脚の正午

頃までも小歌なく相撲の興行は勿論出来ず皆其旅舎に休憩してゐるに獨り高砂浦五郎はあも
 以内であれば兎や角と越方行末と案じ煩ひ煩らす煙艸の烟りより只願胸とぞ焦しぬる其徒
 然につきてまた相撲仲間の悪弊杯如何もなして差除き世の爲又は人の爲に力をつくし具ん
 ものと尋察に暮て居たりし折柄同じ仲間の力士等も降籠られし詮術なさに綾瀬川と始め小
 柳等は高砂が旅舎へ音訊たるにぞ是幸ひと一ト間へ招き世間話しの其末に高砂は兩力士に
 對ひ兼て機會がありたらば我心中と貴殿等に物語らんと思ひしが今日は幸ひ雨中の徒然氣
 の散ゆ座に寄合たれば篤と一議と盡とべし外の事にはあらねども從來相撲仲間にて親方社
 會の苛酷なる十兩以下の相撲の中は弟子に一錢の給金とも渡す皆悉く押領して師弟の間
 に愛情なきゆる半途に業と廢るものは忽地其身の方向と失なひ相撲の果の零落しさと世間
 に見する慘さな素より是は誰罪と指していふべき事にはあらねども今にして改革せざれば
 相撲の名譽は地に墜て終には無用の長物と呼れなん又今一條の悪弊と云は相撲年寄の筆頭
 筆脇に座する者總じて相撲の會言と筆どり威權と弄して弱きと虐げ不正不公の所爲多く第
 一東京の大塲所にて一年兩度の興行にも勸進元と云は名のみ其實郡等が萬事と支配し利益
 あれば黙止て告す損失あれば他に權はす其狡猾も往時より傳へ來りし古傳なれば是とも疾
 く療治して健全無欺の身體とせざれば終には全體より肝腎なる腸とも廢敗さすべし此二
 ツの弊習と改たむるは決して我々の私ならず公然たる相撲仲間の利益にあれば此高砂は
 貴殿等と力と盡せ幾百千の相撲に代り身と犠牲になすまでも飽迄盡力なさんは如何と憤然
 として談ずれば綾瀬川も小柳も比しく高砂が義氣と感じ一議に及ばず同意せしむれば善は善
 げと其一行の相撲取等と打集へ前の事情と説示せしに不殘是と賛成して同意合休したりし
 にぞ高砂は倍々意と得て其座に連判の盟約書と出來へ我より先に血判し順と追て差回すに
 各々他に劣らじと指頭と劈さつ記名の下に血判せしは潔きよくこそ見えてけれ斯一同の決
 心と得たるより高砂は歡喜に堪ず忽地大盃と舉げ衆に對ひ各々方にも知らるゝならん昔時
 徳川家康公には千辛萬苦の功成て四海と治め給ひしより世々其家は將軍の職と奉じ天下は
 武家に歸したる如く三百年來打續きしが世の開けるに隨がつて政治に惡臭と生せしより終
 には勤王の義士四方に起りて徳川の政府と倒し 王政維新の今日と改まりしは好模範相撲
 仲間も徳川の末世に以たる悪習あり疾打拂ふて明ららに治まる形代の自由と得ばやと諭言
 ばなしも義に勇む力士の族が鑽石心轉ばすべくも見ぬざりけり

第二拾三番

去程に高砂浦五郎、綾瀬川山左衛門、小柳常吉等は濃州岐阜驛の旅舎にて相撲組合の改革を謀り衆志同一の盟約を爲し説りて後諸所にて相撲の興行となし其年の十月下旬勢州桑名驛へ乗込ぬ此一行は此地にて興行爲し上直ちに尾州名古屋へ立越え一、興行と名張として一同東京へ歸るべきの手筈なるより心なき相撲取等は唯東京へ歸るのみと娯樂とし敢て餘念もわらざりしが於て是高砂は獨り情々胸算して最早我等が企ての機會も目前に進み来れり夫に就て今日共に謀るべきは綾瀬川山左衛門なり卒や那れ相談して日頃の計畫と施さるやと一日綾瀬川が旅舎と音訊ひ痛かに是と議る様、巽に岐阜にて盟約せし彼の二ヶ條の改良手段は締密易には似たれども舊弊古癖の洗濯なれば一朝一夕には行はるべしとも思はれず寔に至難事業と云べし就て我身の考思には豫ての一義と擔當て貴殿の我等致にても一人此地に踏止まり爰と改正組の根據となし其餘の者は阪京の上臈と堅めて断然と親方社會と談判におよび萬一二ヶ條とも肯れずば相撲一同へ是と説き同意の者は何百名なり此地へ至急繰揚させなば新正純良の一派の相撲と更に當地にて組織べし併し郡にもまた荒神様あり如何なる策と施すや計られねども畢竟相撲取ありての親方なれば我等敢に行はれて弟子に離るゝの場合に至らば必定改革の熱誠と遂なん此計略は如何ぞと問は綾瀬川は勝手と

打ち有繋は大司考考たり什麼も夫を良計ならん幸ひ大哥は此土地に馴染ても居り且はまた根據となさるべき處にあれば當時此地に残り居られよ我身は是より打揚次第小柳等と阪京の上臈と親方衆と談判して豫ての目的と違するやう必死の力と盡すべし若また親方衆の頑固にして一も我々が請願と肯入すば盟約通り袖打拂ひ同志の相撲と語合て再回當地へ繰揚ん其時こそは高砂關「言にや及ぶ一派と立」互ひに自由獨立して「至正至公の相撲と組立」花々敷興行なさん務められよと勇者の密談迭みに意氣と照し合猶も其他の事項まで残りなく打談らひ遂に高砂浦五郎は此地に残り止まる事に決し其後一行の相撲等へ右の趣ひきと説示せしに皆々高砂と綾瀬川との義舉と感して只願其計策と贊稱し萬一談判の纏まらずば再回當地へ引返さんと勇み立たる景狀に高砂、綾瀬川、小柳等はいよいよ「前約と確めたりとぞ

第二拾四番

既に高砂浦五郎等は相撲改良の計畫も稍決せり唯是よりは綾瀬川山左衛門が諸京の上の談判にて合體なすの但しはまた分離なすのの一に歸せんと其事のみと待居たり爾らにまた浦五郎は獨り熱々勘考する様迎も今度の企は至難の上にも至難して到底頑固者流の爲に障害らるゝ事も有なん素より我事成すとも此身は強ち借ひに足ねと有兩時は男兒の意地只

黙々と業と磨で此まゝ故郷へも歸り難し斯云時の談向には願ふてもなら最負の客あり取て
 義氣ある方なれば那方に據て謀議と遂んと當時名古屋に興行中ゆゑ同處より一里計り熱田
 驛の魚問屋石原三右衛門といへる方へ赴きつ前の次第の一伍一什と詳びらるゝに物語り取て
 此まゝ高砂には此地に足と停むる覺悟若御妙素もいはゞ難んで伺ひたしと思ひ入て陳立し
 と主人は篤と聞終り「日頃の和主が氣質左もこそ有り威心せり畢竟年度の發起も業と
 益し害と除く一巳の私情にあらざれば十分努力すべきは勿論時政に依れば分雇して改正組
 の一派と立て世にも人にも恥ざる様百方手段と廻らすべしと懇々との諭示あり猶また高砂
 に對ひて言やう爾有る場合に臨みし上は各自覺悟なくては協はず幸ひ綾瀬川、小柳と始め
 有名力士等名古屋にありて今しも興行中なれば此興行と打上次第熱田驛にて一ト場所捕へ
 和主が興行元となりて一旗揚なば如何ぞや其談判さへ關ひなば我等は産より是と補助け費
 用は悉皆辨と遣し若都合克く利益と得なば是と和主に進すべく若不入にして損失とるども
 決して和主には撥はすまじと最親切なる語と聞高砂は甚く悦び厚く愛顧の情誼と謝し如何
 も仰に隨ふべしとて匆々に名古屋へ歸り夫どはなくして年寄衆へ熱田驛にて興行の相談と
 爲し處る速やのに整ひしかば心中幸先能と喜悅び其趣きと石原方へ通報して興行訖ると待
 居たり去程に高砂等の一行は名古屋の興行と打揚たるより次で熱田驛へ乗込ついで初
 日と出せし所有繫此地は高砂と愛顧の客多くもあり殊に此度のこう行には鞠進元と聞の
 らに四方より相競ふて或ひは積物飾物譽牌に轍と贈られて其景氣最も盛んに日々場所は溢
 るゝばかり朝より蟻志蟻志詰のけて夥多しき人氣と取り首尾よく千秋樂の日迄不思議に大
 入と續けし故爰に意外の利益と得て悉皆計算の餘七百圓割りと剩し積其基礎と堅りしとぞ

第二拾五番

相撲取ならぶや秋の韓錦。其秋去りて冬は來つ此年もはや十一月の中滑と過て末にぞなり
 ぬ有稱ば熱田驛に興行の相撲取等は東京の冬場所も近寄たれば約束通り師府せんと年寄か
 らの饅頭進しに各自用意となす中に獨り高砂浦五郎は豫て綾瀬川小柳等と堅く誓ひ此地に懸
 るの手筈なるより一夜同處の割烹店に登り竊のに此首へ師匠千賀ノ浦と招待し厚く馳走と
 爲したる後更ためて言るゝ様扱も親方には十三年以來海山積る御恩と蒙り其お蔭にて高砂
 も今や前頭の筆頭にまで出世なしゝは父母にも優て辱けなく何時か御恩と報じたと旦夕
 忘るゝ隙はあらねど不肖の身として今日が日まで萬分一の報酬もいたさず如何も漸愧に堪ざ
 る次第と年月思ひと惱まし居たるに時こそ得たれ今度の場所は親方が勸進元の當番なれば

此機に乗じて從來の弊と洗ひ興行中の諸計算は残らず勸進元にて左右するの運びに至らば第一親方の利益に歸するのみならず年寄衆の懸習も是より正しく改たまりて年に兩度の勸進元の名實二ツながら全たあるべし加筋らす相撲仲間の親分衆が弟子と扱ふ無慈悲の始末唯此まゝに棄置なば何時の改正の期あるべき夫とおもひ是とおもふて今度我身が發起となり綾瀬川等と相談の上前願の二ヶ條と打計き斷然改良の一舉有に就ては恁々云々の計策ありよし東京の年寄衆が強く執拗と言張て我等の談判と肯入すば其時にこそ高砂等は斯々云々の思慮あれ素より將來の事にしあれば成否固より期し難けれと時誼に因なば今と限り暫時お分別やそやも圖り知られぬ這回の一條深くは推察下されたしと始めて明そ一伍一什と千賀ノ浦は聞訖りてあまた度歎息し如何も汝がいはるゝ通り往時よりの習慣にて拳頭筆脇(相撲年寄)が私情の舉動親方衆が無慈悲の事柄言に忍びぬ有様ながら是罪罪と指名すべし者にあらねば是までも言す語らで過ぎ越しが汝が日頃の氣負にて改正なさんとの企ては我弟子ながら適れなる覺悟の程とは譽ながら肚の裏には不容易なる難に當りて若も亦却て其身と過まつべき樓梯にばし成はせぬうと深くも案じて猶彼是と开が身の上の諸事と示諭し是非も泪に弟子師匠其夜は袂と分ちしが高砂は其翌日前の料理店へ年寄衆より相撲取行司呼出しまでと呼召き縁ての事情と再同披露し綾瀬川小柳等に東京の談判と堅く委願し是ぞ名残の酒宴なりとて快よく獻酬しは勇ましくも亦盛んなりしと然ば是より綾瀬川等は東京へ歸り高砂は此地に残るの分袂に際し幕下其他二十餘名の相撲取は翻然高砂に歸附するの念を發し同じく熱田驛へ止まりたるころ抑高砂浦五郎が改正組の一派と立し其意氣とは知れたれ

第二拾六番

于時明治五年十二月の中旬綾瀬川山左衛門等は尾州名古屋の興行と打納め年寄千賀の浦と共に勢州四日市驛より漁船に乗込海上風波の難もなく横濱港へ安着し夫より一同東京へ歸りしに恰も好興州筋へ興行に出居りし境川等と始として關取衆は諸道より退々販り若たるものゝら茲に綾瀬川も力と得て先不取敢境川が宿所と訪ぬ一別以來の時誼口誼互ひに無事と祝し合世間話しの其末に聽て高砂と謀りし一義と事おちもなく物語り如何にも從來の習慣とて公正ならぬ次第もあれば此舉に惡態と改ためんは至極の良計なるべしと言葉と極めて陳立ると境川は篤と聞心に感ずる處や有けん直ちに其議と賛成して一味台体の習となせり然れば遠やのに年寄衆へ掛合の手順に及ぶべしと翌日綾瀬川は東兩國なる相撲組の會

所へ到り當時相撲年寄の筆頭なる玉垣額之助。伊勢海五太夫等に對ひ彼の改正の二ヶ條と手づよく談判に及びたれども奈那せん年寄方は多勢にして綾瀬川は孤立なれば却々此方の議論も立す殊に新規の改正説耳に逆ふの苦言にあれば是と容んと云もの唯の一人もあらずして反つて綾瀬川は多勢の者に説諭せらるゝ事となり一戰敗色と呈せしものから無余儀其場と引取りしが境川は夫と聞き疑に同意の交誼もあれば急に一書と認ためて名古屋に殘れる高砂が許へ飛せぬ愛にまた高砂は東京よりの報道あると一日千秋の思ひと爲し待に待たる其折から綾瀬川よりの便りに先立ち境川浪右衛門よりの飛書と得たれば取手も疾く對押披き違はしく辭下せば始めに今度の一條と略記し綾瀬川よりの報知に因て詳しく顛末と承知せりと堅く一味の誓詞と陳べ次に高砂が義氣と稱し且また厚く高志と謝し重ねて東京の情態と述て曰甚はた以て綾瀬川一名にては心元なし至急貴殿も上京ありて決然談判いたされなば或ひは成就の期に達せんと思ふ上京と頼め越せしが遂に綾瀬川が擔任て歸京なせし其後に未だ通報もあらざる前ゆゑ免まれ角まれ其方の模様と聞た其上に出京なすとも運のるまじと心の裡に尋思と決め第二のたよりと待中も境川よりの書中に寄ばすの八九は成就とあるに大いに喜悅の眉と開き日に吉報とのみ待てとり然るに其後綾瀬川よりの

報知と見るに却々年寄衆の勢力強く更に肯入氣色あらねば今猶百方盡力中とあるに高砂は胆し長嘆息して天と仰ぎ噫我事は成ざるの又是非もなき次第にこそと獨り慷慨の泪に暮れ鬱々として樂まず猶後報の至ると待しに早東京の市中にまで其事隠れなく傳播して高砂と愛願の客より屢々書信と寄らるゝ中愈々綾瀬川は舌戦に敗と取り力足ざるに屈しけん敵の陣門へ降伏せしと聞しのは後に高砂は斷然歸京の念と絶ち又奈那ともせる能はされば遂に愛知に止まりて一派の相撲と組織んといよく決心と堅めたり

第二拾七番

去ればまた往く水の流れば早く。其年もいつしのに喜果て明れば明治六年の一月とはなれりける愛に東京の相撲組は回向院の境内にて暮場所の興行（相撲組合にては一般に舊暦と慣用し舊暦の十二月と新暦の一月に當ると以て今日に至るまで一月の大場所と暮場所と稱の習慣なり）あるに際し客年名古屋に止まりて相撲は高砂浦五郎。小柳常吉。と始め既に製工し番附の名前と刪り或ひは墨と引て其姓名と抹殺し公然江湖へ配付せしにぞ高砂等は大いに怒り悪くき年寄どもの暴動のな此遺恨と胆に銘じ他日必らず復讐せんと同志の相撲等にも親く示し其年の二月中旬高砂は獨り東京へ來しに折しも大場所のこう行終り神田明

神の境内にて稽古相撲の興行中と聞し幸ひ直ちに其場へ赴き、幕内幕下の闘取共に面會し必至と改正説の可なると論じ同志の族と誘なひ飯り一派の相撲に組入んと懇々遊説と試みれど皆年寄共の威に怯て口頭是と賛成するのみ眞實左袒の様子あらねば共に謀るの人々ならじと早くも高砂は東京と去て名古屋へ飯り改正相撲組と云と立て自のら組の取締と成て愛知縣へ上 馳し更に營業鑑札と請受諸所にて相撲と興行せる中爰に一椿事と惹出したる顛末と記んに或時大和地方とて行中同國の奈良にて一場所の相撲ありしが元來當所には五十組と稱ふる素人相撲あり五十人の力士と集め素人ながらも川山の名と呼ば此邊郷にて折々花相撲と催せば遂に五十組と他もよび自づと其號の如くなれり此五十組の氣力と櫻山伊六といひ鳥なき里の蝙蝠と狭き土地に羽翼と翔げ剛愎自用弱きと凌ぎ心良らぬ男なるが頃日高砂浦五郎が勸進元にて改正組の相撲こう行するを聞卒我組も見物して彼等が技倆と見て置んと同勢凡て六十名餘初日の朝より打揃て其こう行場へ來りしが木戸へは五十組なりと名乗て一錢だも拂ふ事なく殊に上等の機敷へ上りて傍若無人に見物し盛んに飲食なごなせしものども更に其料とも拂はねば高砂は見るに見兼ね間に得埒ぬ義氣快勝忽地憤怒胸間に懸せ那の櫻山が傲然と機敷に見物なし居る處へ驟々地に身り行き突然櫻山に打對ひ。貴殿等は何處如何なる方よりして免許と得しのは知されども惣じて諸般のこう行物は看客と招て其料と受け是と勸進元の利徳となご有爾ば相撲に無給の者なく看客に無銭の人なき筈なり夫等の事は明治の今日三才子も知た道理なると何とおもひ辭めしにや六十餘名の同勢と引連ながら木戸も拂はず剩さへ其方で上等の機敷と好み其代のみ酒食の料まで拂はぬと云無法の舉動我と誰とのおもひて居る今度日本に一派と立たる改正相撲組の取締高砂浦五郎と知らずやと大聲揚て怒鳴立れと理非分別せぬ櫻山心中少しく恐れしが多勢の手前と苦笑して假令其方が改正組の高砂でも取締でも奈良には奈良の風習ありて櫻山が子方の者五十人は五十組と他にも呼れ土地にてこう行のある場所へは無銭で遁入が尋常だ如何程叫ささわぐとも汝等ごときに一錢だも我金錢と拂はんやと人もなげなる挨拶に事ごと起れと一同は顔見合して居たりけり

第二拾八番

高砂浦五郎は櫻山が其一言と聞よりも満面に朱と沃ぎし如く汝等いよく其料と拂はぬがらは世にいふ盗人も同じき罪あり我は是より汝等が罪の次第と直ちに其筋へ訴たへやせば爰時其首に扣てとれと睨まへながら機敷と降り既に同處の縣廳へ出訴なさんと慌燥と土地

の顔役兵庫屋平助といへるが是と聞き急ぎ高砂と引とめ頼りに穩めて居たる中棧敷に居たる櫻山等は卒飯らんとて子方と引連れ既に木戸まで出んとしたると改正組の相撲等は曩刻に高砂が棧敷にて罵り合し奴等と見るより道に狂ひて一人も出さず四五十人して身輕に打拵強て木戸より出るとならば入たる時の木戸錢と棧敷の代と酒食の料と爰へ並べて飯られよ若左も無ば汝等と一人なりとも此場より怎麼で出して遣べきぞ如何に〜と問詰ると答もなさで五七人無理に出んとするよりも最早容赦すべきにあらずと突然拳と振堅め滅多無性に打のれば那方も多勢と頼みとなしソレ組合が撃れたぞよ負傷させられなど口々に勦拵めき連て闘み合その騒動は大方ならず浦五郎は兵庫屋に扯とめられて居たりしが場所より急報と得たりしかはいよ〜以て打棄がたしと飛出さんとなしたると再回兵庫屋は是と制して其許と放ち遣なばま〜暗嘩と大きくするのみ兎もあれ我身に任せよと強て高砂と家へ停置き其身は乾兒と十四五名急ぎ仕度と整のへさせ直ちに相撲場へ引連めさ組づ解れつ敵味方が前後左右に争そひ居る喧嘩と双方へ引分ち段々櫻山へ談判して遂に高砂へ賄話と入させ漸々和談と〜のひしこの事忽地遠近の聞ぬ其翌日より高砂の相撲と見んとて山なす見物の大入に災難却つて幸福となり是よりして高砂の名四方に轟ろき強きと挫ぎ

弱と助くるの評判と得且此時のこう行も不時の利潤と得たりと云有爾のらに改正組は當時の勢力破竹の如く河内 和泉 大和 の内にて數度のこう行も無事に打拵勢ひ込で大坂へ乗こみしに大坂の角舩組にも改正組の組織と聞知て舊來の組合と脱離なし高砂に依て改正組へ加盟せし者ありたるより大坂の角舩組は大きに是と忌嫌ひ遂に改正組と親しむを種々逆倒なる事藤と惹起しうば前途と圖りて高砂は大坂に永居せず進んで播州地へこう行に赴き久々に舊主若姫路候へ拜謁し維新後角舩の變革と一伍一什育上に及し處酒井公にも殊の外に感悦せられ種々の賜物などありしうば舊情の地と去に忍びず暫時姫路に滞在しぬ爰に又改正組の美談と云は元來播州地方は維新前頗ぶる穢多の多き土地にて明治の以後新平民と改稱ありても兎角に平民と折合す飾磨縣にては屢々是等の説諭ありて頗ぶる盛力の時も時新平民の中力量他に勝れし者は角舩營業の鑑札と受け頼りに腕と摩りて居れど奈何せん此徒と伍して相撲と取ものあらざれば彼等も常に之と歎き空しく皮肉と肥し居たるに幸はひ此度改正組の相撲共が姫路に滞在中と聞より或人に紹介と委囑合併角舩の取組と請たれば必も却々高砂には此相撲と承諾すまじとおもひの外是を改正の大眼目と快く承引れしのは匆々興行の準備となし花々敷觸太鼓と回せしに近來稀なる相撲にあれば初日より山なす

大入小家も宛がら崩る、計りに殊の外なる景氣ながらも見物は口々に新平民の相撲取と引人畜生杯と誹謗せしより新平民は是と怒りこう行場に於て大騒動と惹起し死傷さへも多かりしが改正組の相撲には敢て一人の怪我あらずりしは實に天幸と謂つべし此事心ある人は見聞て大いに高砂か度量宏きと感賞し于今那地の相撲好は美譚となして措ざる由聞がまにく序に記しぬ

第二拾九番

夫よりして改正組の一行は岡山(備前)尾の道(備後)邊とこう行し轉て四國路へ渡航なし阿波の徳島より讃州高松近郷と打回り多度津と終局として大坂へ歸りしに此時西京にては三都合併の大角艦と催すの仕度最中と聞き今こそ東京の角艦年審等に曩日の復仇と爲す機会と直ちに西京へ乗込往き大騒動と惹起せし時圖らず當時の愛知縣令鷲尾隆聚君に浦五郎は拜講し同地と花々敷引揚しは人の能知る處なれば敢て茲に諄々は記さず偕も高砂浦五郎は其一組と引卒して尾州名古屋へ歸りしが縣令鷲尾隆聚君は西京にて見聞せし浦五郎が義膽と感と召出して愛知縣下諸興行取締役と申渡し年俸若干と下賜されしは寔に一世の榮譽とこそ申べけれ去るらに改正組も追々力士の數と増し大坂よりは熊ヶ嶽、西京よりは磯風杯いふ強の者の加はりしのは關西の地は此一組の威風然から凛然として改正組の高砂といつは三才子も其名と知ると云斯して明治七年も過ぎ同じく八年の秋なりし浦五郎は肚裏にかもふやう一回我組と東京に移し舊弊組と肩と比べて贏輸と試るみんものどさうに用意と爲しめて陸路と東京へと押登り一時馬喰町へ旅宿と定めて神田佐久間町なる秋葉神社の境内にて改正組の興行ありさらぬだに新奇と好む都會の癖未だ見馴す見馴ぬ角撲取の顔觸にもあり且その頭取は曩に東京の相撲組と分離したる高砂浦五郎と聞ものから初日より大人氣にて一戰勝と占たるより浦五郎は神田龍閑町に家居と構ゆ爰と改正組の根據となしぬ夫より後は東北地方と此一行は打回り飽まで兩國組(舊來の東京相撲組と云)に抗抵し常に軋轢の争そひ絶す然るに明治十一年二月五日東京警視本署よりは甲第十一號の布達と以て左の規則と發布されたり

○角艦并ひに行司取締規則

第一條 角艦及び行司たらんと欲するものは其區戸長并びに組合取締の奥印と以て警視本署へ願ひ出鑑札と受べし

第二條 居處と轉する時は第一條の手續と以て鑑札書換と願ひ出べし(但書は略す)

第三條 角紙及び行司は東京府下と一ト組となし角紙は年寄行司は重立たるものにて年番と定め組合取締となすべし(但し年番交換の都度其姓名と届け出づべし)

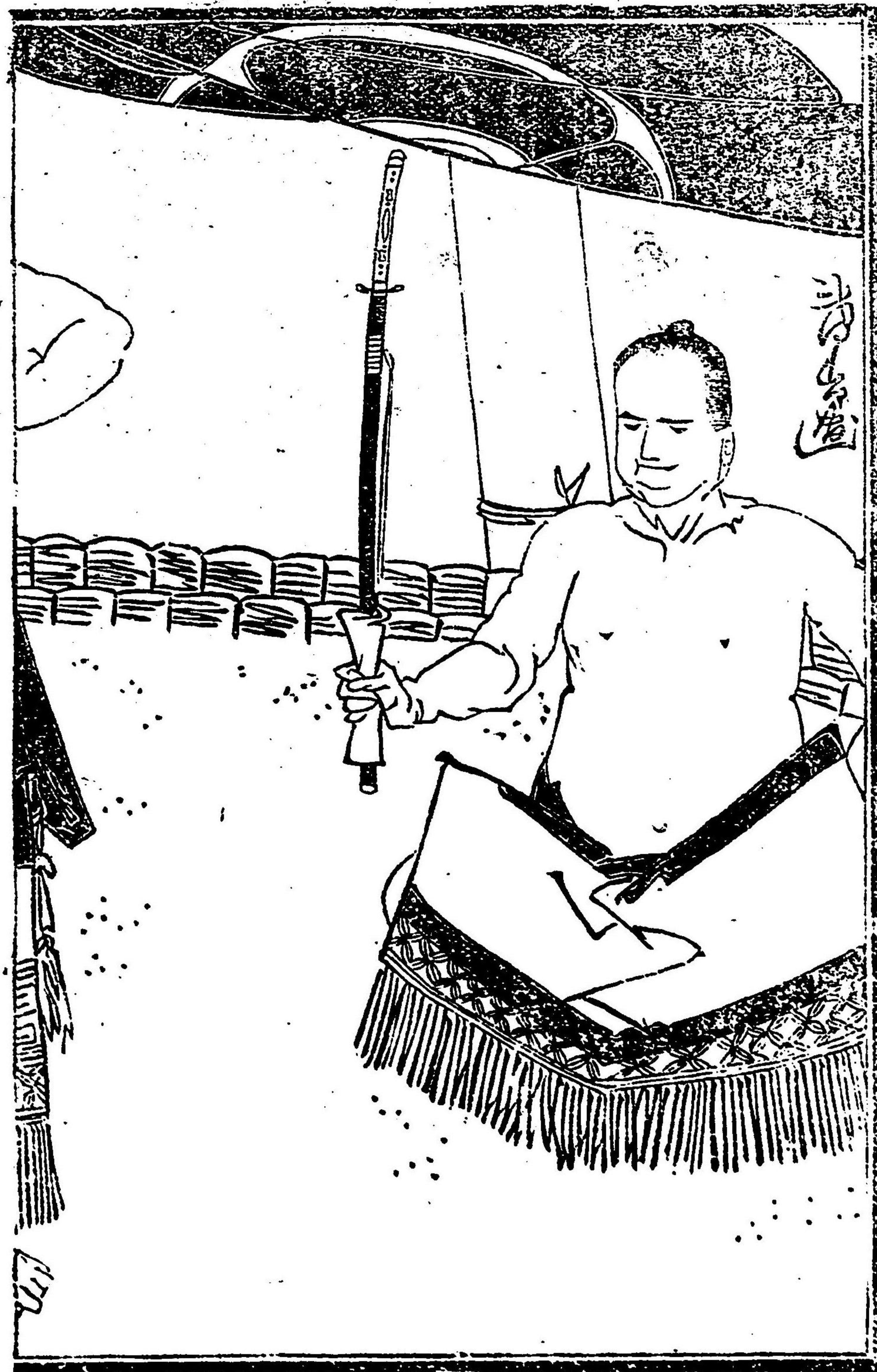
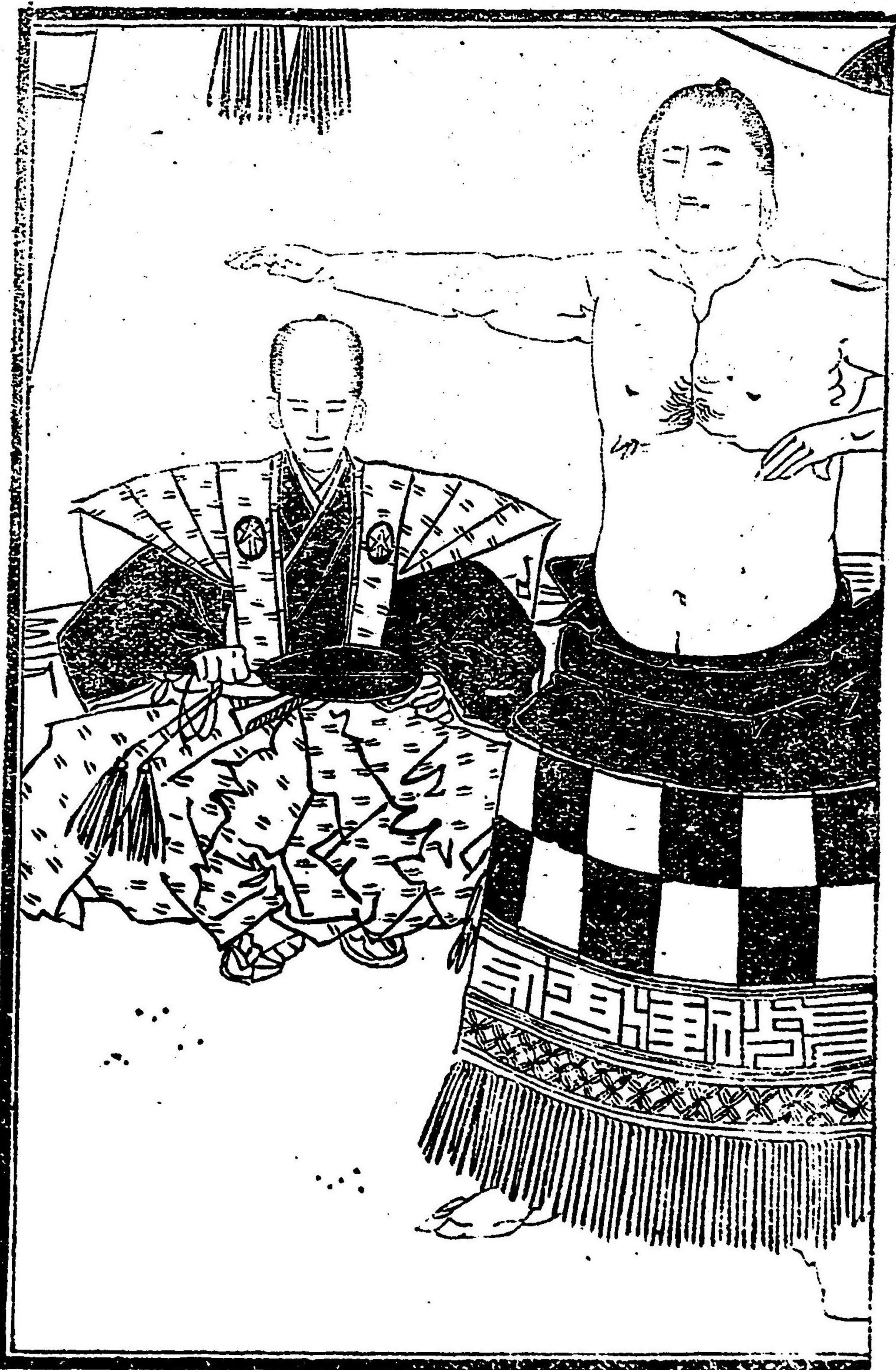
第四條 無鑑札之者及び組合に入らずして其業となすと許さず
と有たるより改正組と兩國組が遂に合併なしたる次第は大團圓に説盡さん

第三十番

此時に丁りて有繫老練の聞ある兩國組の年寄共は逸早くも我組のみと東京府下の相撲組と自稱し擅まゝに組合中の年寄と以て取締の役に任じ其趣き々々警視本署へ届出で次で取締は奥印となし其組の相撲一同の營業鑑札と願ひたるより兩國組のみは無事に興行の公権と得たれども獨り改正組の一行は此御布達によりて兩組合併の趣意ならんと思惟せしにぞ未だ其手續も成ず居りしに既に兩國組に於ては一ト組の相撲鑑札と願下たりとの報知と聞き高砂浦五郎は不審に堪ず直ちに警視本署へ出頭して此度角紙取締規則發布に付ては兩國改正の二派共に合併すべきの處如何なる事情ありての事や獨り兩國組に於ては營業上の交誼もなく一應兩派の相談とも盡さずして擅まゝに其組のみ東京府下の相撲なりと自稱し早其事と官へも届けに及びたりと道路の風説に聞込たり其責確説に候はゞ年度の御布達の趣旨にも背き第一我改正組の相撲共は罪なくして營業権と稱れたるの不幸に陥り今日より數百人は飢餓に迫るの困苦と致せり若夫兩國相撲組の獨り東京府下の相撲組合なりと自稱するを得ば我改正組も又東京相撲組合なりと自稱し更に一人の取締と置き營業鑑札の下附と請んも妨げなからん然れども其等の事は決して爲すべきの業ならず官にもまたお許しあるまじ就ては曩に兩國組の届け出たる組合と解釋さ東京府下と一組となすの公令に基づき兩組合併の御沙汰ある様只願に乞申せしむる官にも御詮議の筋ありてや其二月より五月の下旬まで何等の御沙汰もあらずしが其間改正組は更に營業もせざりしものから艱難窮苦は一ト方ならず去れども剛膽なる高砂は少しも屈せる色と見せず部下の相撲と愛撫して銳意前説と主張なし孤城と守りて動のざりしと或官人の聞及びて兩組の間と周旋し遂に五月廿四日久しく結んで解さりし双方の紛議と解き二派合併の上諸事と談じ舊弊古習の風俗と改良して更に左の通りなる角紙營業内規則と撰定したりと云

明治十一年二月五日警視御本署甲第拾一號と以て相撲并びに行司取締規則御布達により東京府下相撲合併一ト組と相成候に付協議の上更に左之通り内規則相定め候事

第一條



春冬兩度大相撲興行の際其損益金精算之義は榎敷土間新榎敷小問々に至る迄取締年寄に及び歩持年寄並びに願人差添 兩 大關とも出會の上差引精算可相立事 但し府下に於て修行相撲興行之際精算之義も本文同様たるべき事

第二條

春冬兩度大相撲興行の精算帖は願人へ寫し取相渡し可事

第三條

春冬兩度大相撲興行の願人及び差添人の義は歩持加入の順序と以て相定めべく其兩人之内願人になると差添人になるとは關引と以て定むべし且興行損益金の歩方惣持惣人員の責任たるべし最も益金有之節は多少と論せず其一割と願人並びに差添人へ可取渡事若損金有之節は願人差添人とも歩持一同割合と以て出金可致事

第四條

春冬大相撲とう行濟の上取締年番及び重立たる年寄并に兩大關 出會の上勝負と檢査し給金増減可致事 但し給金の増減に依り番附順席と至當公平に可相定事

第五條

新たに東京府下の角組組合に入者は直ちに其力技の優劣と試檢し一紙協議の上至當の給金と定め公平の番附順席へ記載すべき事

第六條

新たに角組年寄となる者は從來の年寄惣人員之末席に記名すべき事最も拾兩以上の者にて年寄となる者は末席より十人目に記名する事 但し横綱及び兩大關の者年寄となるとき其組合の協議と以て定むべき事

第七條

他府縣下へ出稼之節は歩持年寄之給金七圓歩持外の年寄は給金五圓と相定め候事 但し關八州の外は右給金へ二圓と増加する事

第八條

他府縣下へ出稼之節は取締年番及び年寄兩大關立會之上番附と關製し出稼可致最も出先に於て年寄の指圖と用ひず自儘勝手之義一切不相成萬一自己の勝手のみや暮り其場に居残り或ひは逃走等いたし候者於有之は歸京之上其筋へ御届被門可致事 但し兩大關と雖も自儘の所爲あるに於ては本文の通り可致事

(第九條第十條は緊要ならざるに付略之と)

第十一條

組合取締年番撰定の儀は營業人一般の投票と以て相定め可申事 但し取締年番撰定投票の節關取以下の者は其師匠へ委任致し候とも妨げなしとす

第十二條

取締年番の者と雖も私意と擅まゝにし壓抑不正の廉有之節は一般の協議と以て其取締年番と廢し協議の上更に取締年番と撰定し其趣を警視御本署へ可届出事

明治十一年第五月廿四日

此内規則書と双方へ爲取替而して後改正組の相撲共と兩國組の相撲共の力量と試るみ更に改正の大番附と調製し漸次親睦の意と表しぬ其後高砂浦五郎は相撲年寄の人数と限るの議と起せしに大いに多數の賛成あり仍て新たに年寄となるを禁じ員數八十五名と以て定限となす是又相撲組の利益と云斯の如く高砂浦五郎が熱心相撲組の改良と努むるの精意に感じ有名の年寄玉垣伊勢の海等は萬事と舉て高砂に委託し又相撲取一同も深く高砂が義侠と慕し明治十六年一月年番取締の投票多數と占め今也東京相撲組の頭取とまで進爵たり弟子

にも又有名の力士なる高見山は東の小結に進み大達。一ノ矢は前頭中の屈指なり其他四十餘名は各自強壯活潑にして末頼母殿ものせもなりとぞ噫一介の農夫宿昔の志望茲に達して遂に今日の名譽と得たり古語に曰く精神一到何事か成さらんと此一句と以て編者臨筆の責と塞ぐ目出度く

孤蝶園主假餘白て一言す本編高砂浦五郎が履歷未だ其全豹と揭るに至ず猶明治十一年前後の事舉るに數條の功績あり他日續編の起稿と以て初て瓦章の完全と得可し看官請諒焉

四十八手 檜太鼓音高砂 大屋 相撲古實

明治廿七年五月十五日印刷
同 年同月廿七日發行

發行一者

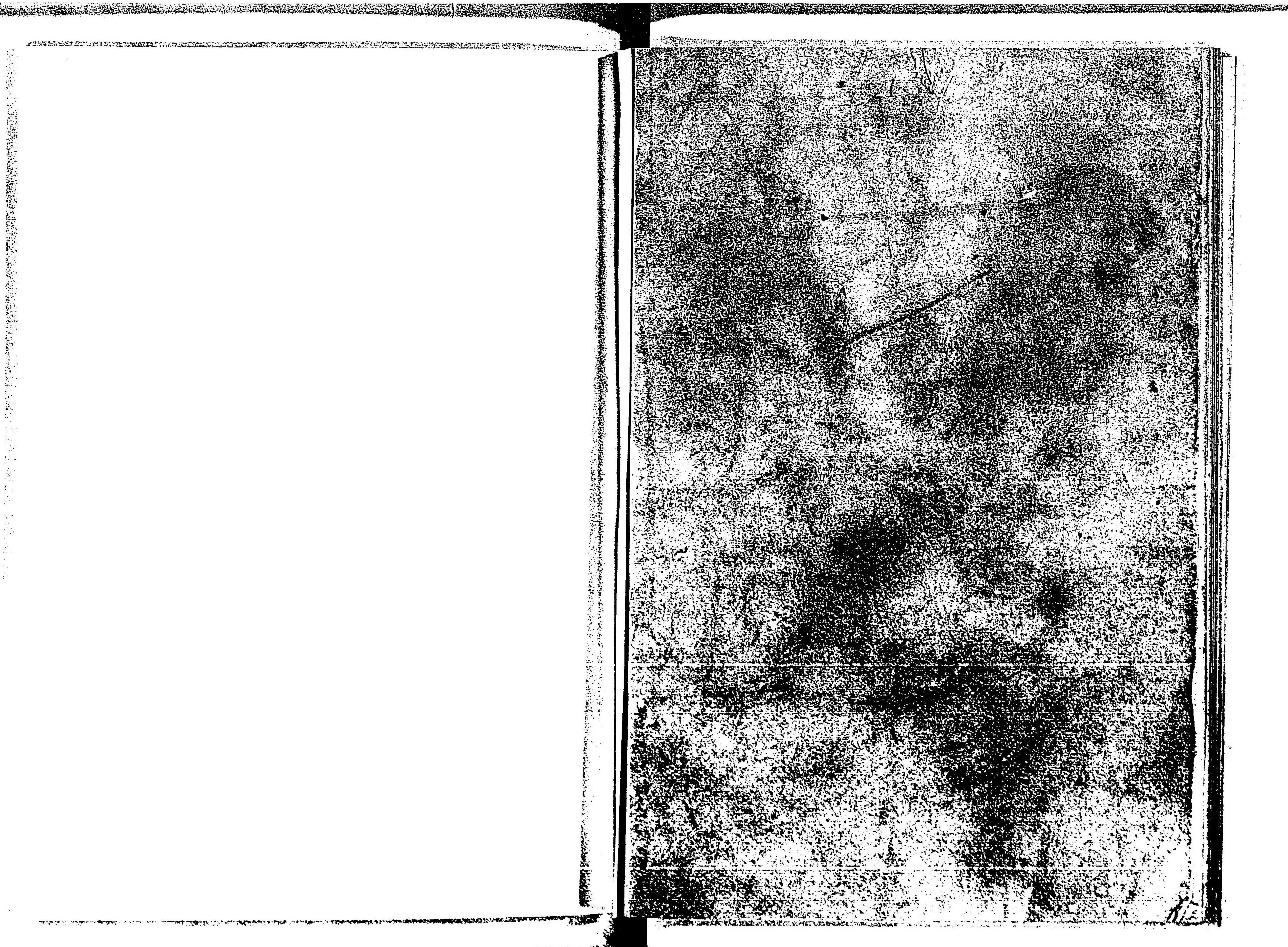
落合三雄

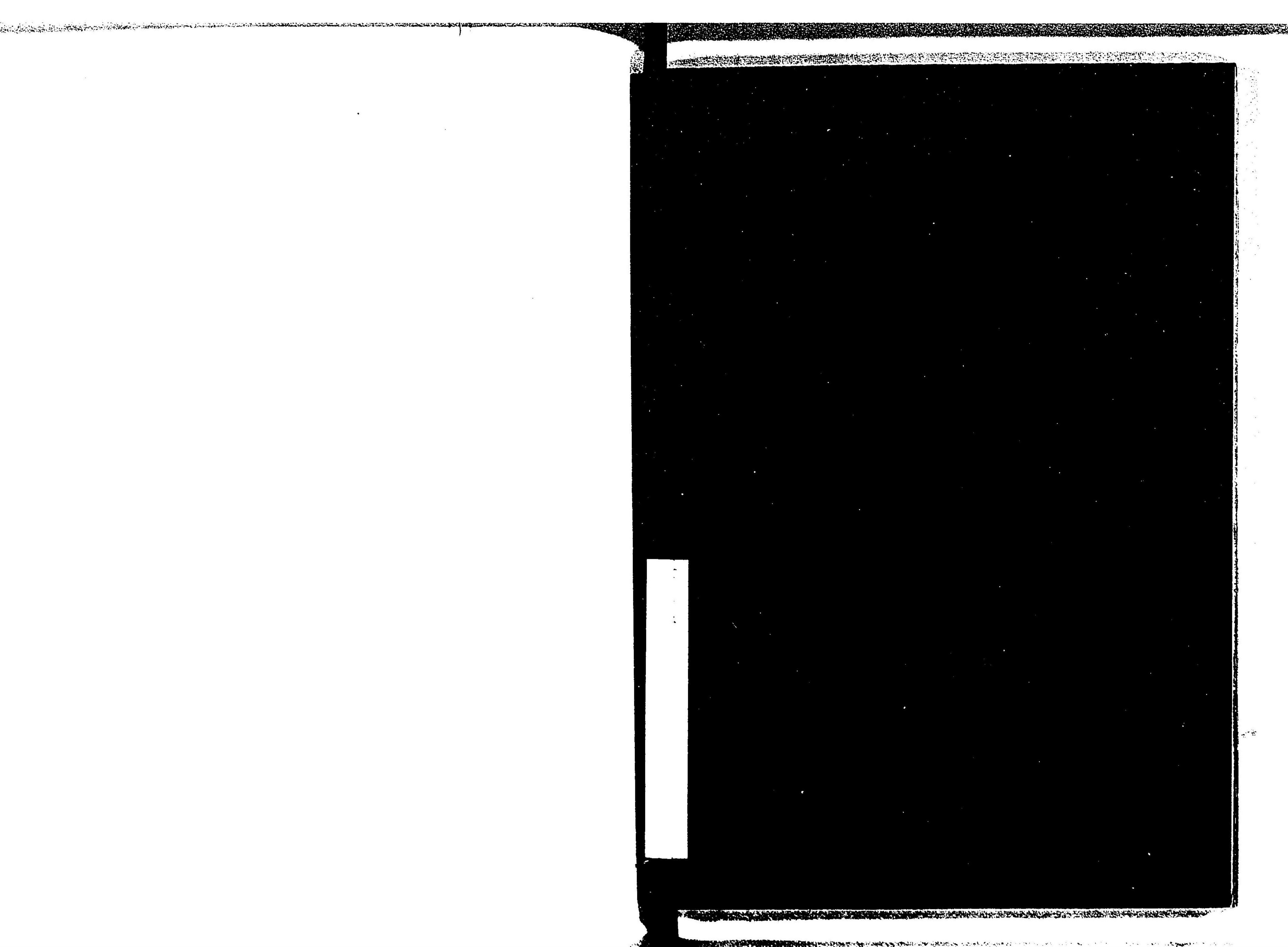
神田區佐久間町三丁目
三十八番地

印刷者

大場沃美

神田區柳原河岸
第十一號地





特 46
939

四十八手
相撲歌 櫓太鼓音高砂
前

国立国会図書館

091498-000-8

特 46-939

櫓太鼓音高砂 (四十八手相撲古実)

孤蝶園 若菜 / 編

M27

DBN-2467

